
漆黒の旅人

Rukena

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の旅人

【NZコード】

N4819J

【作者名】

Rukenna

【あらすじ】

ある日漆黒の旅人は魔獣に襲われていた町について。町の様子は悲惨としか言いようのない状況。魔獣達は殺戮の限りを侵してこの町を後にしたのか一匹も見当たらない。町の人達は魔獣に対抗したのだろう、死んでいる魔獣も町の中にいた。旅人は町を歩き一人の生存者を発見した。少女は瓦礫の間でひどく怯え、震えながら縮こまっている。

旅人はその姿を見て言った。「一緒に来るか。」少女は酷く驚いた様子で震えながらこくんと頷いた。それから漆黒の旅人と少女の当

てのない旅は始まつた。

?

「ふー…今日はここら辺で休むか。明日くらいには村につくだろうじ。」

一人呟くとその青年はカバンから保存してある干し肉とパンを取り出し食べ始めた。青年は遠くに見える村を見据え明日の事を考え早めに寝とくかと心のなかで思い、食事を済ました後横になり夢の中におちていった。

「ん…」

青年は遠くからの雑音で目が覚めた。あたりはまだ薄暗く、村とも離れているため音なんて届かないはずなのに…

青年は寝ぼけ眼で雑音のする方角に目を向けた。そこには真っ赤に燃え上がっている部分があり青年が明日いくはずの村だった。

青年はカバンと得物である漆黒の大剣を持ち村へ走った。

青年がその村に到着した時には村は壊滅状態であった。そこには村に住んでいたであろう人々の亡骸や魔物の屍が散乱していた。青年は生き残っている人いないか捜すべく町を歩いた。だが人の気配は全くなく、辺りは静まり返っていた。

青年が諦めかけていたとき微かにすすり泣く声が聞こえた。青年は声のする方角へ歩んで行つた。

そこには小さく縮こまっている少女がいた。着ている服はボロボロで足からは血が出ていて真っ赤に染まっていた。

「大丈夫か？」青年は静かに語りかけるように言った。

少女はゆっくりと顔をあげ青年を見上げた。

「何があつたんだ？」

「……い、いきなり魔獣が村に現れて…村の人を」少女は全てを言い終わる前に泣き始めてしまった。

青年は少女に駆け寄り小さな体を抱きしめた。少女は青年の胸の中で溜め込んだものを出すかのように泣き続けた。

少し経つと少女は力を手放したかのように寝てしまった。魔獣が現ってきた時から気を張っていたのだろう。青年は少女をゆっくりと寝かせ、足の治療を行い、それが終わると自らの漆黒の外套をかけた

それからしばらくして青年は落ちていた農具で穴を掘り、亡骸となつた人々を一人一人埋葬していった。終わるころにはすっかり日も落ち、辺りは暗くなつていた。

青年はそこら辺にある木材を集めて火をつけた。少女は先ほどから酷くうなされていた。青年は少女の手をそつと握り、自らも横になつた。しばらくすると悪夢が去つたのか少女はすーすーと規則正しい寝息をたてていた。青年はそれを確認してから夢の中におちていつた。

時間は過ぎていき朝になつた。

「ん……。」

青年は日の光で眩しそうにしながら目を開けた。隣を見ると昨日の少女がいなくなっていた事に気付いた。青年は少女を捜すため辺りを見回すと、住人を埋葬した場所で手をあわせていた。

少しすると祈り終わつたのか静かに目を開け、青年の方に向きゆつくりと歩いてきた。

「昨日はありがとう……。」

そう言つて青年の横に座つた。

「墓も作ってくれたんだね……。」

「まあな。」

「ありがとう。」

「もうここって氣にすんな。」

青年は少女の紅い髪をくしゃくしゃと撫でた。

少女は青年のされるまま撫でられていた。そして少しだけ笑った。

「なあ名前なんていうんだ？」

「フイオ。お兄さんはなんて言ひのへ..」

「フイオか、いい名前だな。俺はレン、よろしくな。」

「レンさんだね…うん、覚えた。」

「呼び捨てでかまわないぞ。後、敬語もなしだ。」

「わかりま、分かつた。」

「まあ無理にとは言わないし勝手にしてくれ。そんでこれからが本題だ。」レンは一呼吸おいてフイオに告げた。「これからどうする？」

フイオは少し泣きそうな顔で村を見た。

レンはフイオに優しく語りかけながら言った。「一緒にくるか？」

フィオは一瞬驚いた顔でレンを見上げた。そこには優しい笑顔で少女を見ているレンの顔。そしてフィオは驚いた表情から一転、すこし目に涙を浮かべながら「クンとうなづいた。

「よし、そしたらフィオのボロボロ服をどうにかしなきやな。足の怪我は平氣か？」

「うん。レンが手当してくれたから。」そうこうしてこうと微笑んだ。

「でも服なんてないし……隣の街まで俺の外套着ときな。」

「でもレンが……いいの？」心配そうな顔でレンを見上げる。

「大丈夫だ、心配すんな。」と笑いながら言つた。それからレンは軽装のまま背に漆黒の大剣を背負い、カバンを持ち上げた。

「じゃあ行きますか。」レンは次の町にむけて歩き始める。

そしてフィオもその後ろについていった。

?

(あの村から結構歩いたな。)
レンはカバンから地図を取り出して現在地を大まかに把握していった。

「ふー半分くらいまではきたかな…。フィオは大丈夫か?」

「うん、まだ大丈夫だよ。」その声にはあまり力が入っていない。

「…嘘つくな。さつきから声に力がないぞ。少し休憩するか。」

「レン、ごめんね。」

「謝んなくていいつつ。」レンは苦笑しながら言った。そしてカバンから水を取り出しフィオに渡した。フィオはレンから水を受け取りおずおずと飲みだした。

レンとフィオが目指している街、リンバルは農業が盛んな土地で自然が多く比較的穏やかな街である。だがこのところフィオのいた村のように魔物が多くなってきていたため、どのような状況になつているかレンにも分からず、自分達もいつ魔物に襲われてもおかしくない状態であった。レンとしては早めに街まで行きたい所だったが、レンはフィオの事を気づかいゆっくり歩いてきた。

「よし、あと少しだ…フィオいけるか?」

「ちよつと休んだし大丈夫。」そう言って立ち上がった。

一人はゆっくつと道を歩いてく。

「なあフィオ、フィオの事聞いてもいいか。」突然レンがフィオに言った・

「いきなりどうしたの？」レンからの突然の会話にびっくりしたのか、隣に歩いてるレンを見上げたながら聞く。

「いやフィオがあの村でどんな事をしていたのかなーって。」レンはフィオを見つめ返し微笑んだ。

「私はあそこ教会で育つたの。」フィオはぼつぼつとしゃべり出した。

「私が子供の頃、あそこ教会のシスターに拾われたの。それからシスターが私の面倒を見ててくれて…って言つても覚えてないんだ。シスターに教えてもらつたんだ。でもでも、最近は私も教会の手伝いとかしてたよ。レンは？」

「俺は…まあ自分探しの旅つてとこだな。」

「自分探し？」フィオは首を傾け聞いてきた。

「ちよつと前までは傭兵やつてたんだがな、その前の記憶がないんだわ。だからその前はなにをやつてて、どこに住んでたのか知りたくてな。自由気ままに旅人やってるわけよ。」

「そりなんだ…。」とフィオは小さく呟いた。

フィオも子供の頃にシスターに拾われる前の記憶がなかつた。村での生活が自分の全てで、シスターがほんとの親なんじゃないかと思うほど自分に愛情を注いでくれたし、村の人たちは家族のように接してくれた。だからフィオとしても無理して記憶を思い出そうとはしなかつた。さつきレンが記憶喪失の事を話してくれるまで、自分も記憶喪失だつたんだ、と思い出すほどだ。フィオはレンと同じ境遇だつたことに驚きつつ、同時に運命的な何かを感じていた。また自分を助けてくれたレンの力になれるよう頑張ろうと心の中で誓うのであつた。

それからレンとフィオは互いの話をしながらリンバルへ歩いてた。

「ん…あれは馬車だな。なんかあつたのか?」遠くに見える馬車はなぜか止まっていた。一人は近づくにつれはつきりと原因が分かつた。…魔物だ。

「フィオ、ちょい急ぐぞ。」レンは静かにフィオに叫ぶ。

「きやあ!」フィオはいきなりレンにお姫様だつこをされて驚く。だがすぐにレンの胸元を強く握り締めた。レンは全速力で駆け抜けた。

近くに行くと兵士が魔物相手に苦戦していた。魔物は5体、鋭い嘴に目が4つある鳥型の魔物、2メートルはあるであろうごつい体格と手には木製のハンマーを持っている魔物、そのモンスターの子

分なか少しこの魔物が3体。戦っているのは4体だけで鳥型は戦況を見ていた。レンは魔物が戦況を見ていることに驚いたが、幸い怪我人はいるものの死んでいる人がいないことに安堵した。

「フィオここでちょいまつてな。」レンはそう言って、フィオの赤髪を撫でた。そして背負っている漆黒の大剣を抜き魔物に突っ込んでいった。

「邪魔だ！ どけ！」レンは叫んだ。兵士は一瞬レンの方に向き、魔物から離れた。レンは手前にいた小さい魔物を横になぎ払い兵士の前に立つ。なぎ払われた魔物は5メートルくらい吹っ飛び、そのまま動かなくなつた。そして近くにいた兵士に「早めに怪我人の手当てをしろ、手の空いてるやつは小さいやつを集中して叩け。でかいのは俺がやる。」といい魔物に向かい走る。魔物は向かつてきたレンに対しハンマーを振り下ろす。レンは避けずに大剣を振り上げた。そして「ドゴンツツ！ ！」という衝撃音が響いた。

フィオは森に身を隠しながらレンを見ていた。最初に小さい魔物を片手で持った大剣でなぎ払ったときは啞然とした。他の魔物よりも小さいと言つても160センチくらいはある。レンは180センチくらいはあるが瘦せていて、片手で大剣を持つのにも驚いたのに、なおかつ魔物を5メートルも吹き飛ばしたのだ。そして近くの兵士に少し話すと、迷わずでかい魔物に走つていった。魔物は当然レンを狙い、手に持っている馬鹿でかいハンマーを振り下ろした。レン

はハンマーがあたる直前に手に持つていて大剣を振り上げていた。 フイオは反射的に目をぎゅっと瞑つた。 恐る恐る目を開けるとレンと魔物が互いの武器に力を込めて押し合っているのが見えた。 フイオはレンから貸して貰っている外套を知らず知らずに握り締めた。

「終わらすか…」レンは呟く。 次の瞬間一気に力を入れ魔物のハンマーを弾き飛ばす。 そして…魔物を両断した。 魔物は声をあげる間も無く散つた。

「あとは鳥だな、そこの兵士！ 剣を貸せ。」兵士は恐る恐るレンに剣を貸す。 鳥型の魔物はでかい魔物が死んだのを見届けると、逃げるよう飛び立つた。「逃がすかよ！」レンは兵士の剣を魔物に思い切り投げた。 その剣は凄まじい勢いで魔物の胴体に突き刺さり、魔物は落ちていった。「かたずいたな。」抑揚のない声でレンは言った。 いつの間にか他の魔物も兵士達が片付け、残りの兵士は怪我人の手当をしていった。

「旅のお方、礼を言います。」兵士はいきなり現れ、助けてもらつたレンに言う。「別にたいしたことはしていない。 フイオ！ もう来ていいぞ！」兵士にそう言うとフイオがいるであろう森に向かつて叫んだ。 フイオもそれが聞こえたのか、小走りでレンに向かつて走ってきた。 フイオはそのままレンに抱きつき「レンすツツツゴイ強いんだね！ びっくりした！」と興奮気味に言つ。 レンは「傭兵してたからな。」と苦笑しながら言つた。

辺りに魔物がいなくなつたのを感じたのか、一人の女性とそれに付き添つてゐるメイドが出てきた。そしてレンを見るなり「人は一瞬固まつた。そして次に叫んだ。「レン！？」「レン様！？」

?

「それで説明してくれるんでしようねー！」

「逃がしませんよー！」

レンは馬車の中で追い詰められていた。

あの後レンとフイオは馬車から出てきた姫とメイドによって無理やり馬車の中に入れられ、レンは一人に質問攻めにあつていた。

「まあ落ち着けって。」

「落ち着けません！……！」

「ははは……」

レンは必死に一人を落ち着けようとしてるが全く効果はない、むしろ悪化してるといつてもよい。その様子をみてフイオは苦笑いを浮かべている。しばらくレンの説得は続いていた。

そして説得の結果、レンはもちろん負けた。

「…分かった、悪かったよ勝手にでつて。ちゃんと話すから。」

「「ちやんと話してくださいねー!」

一人はレンを睨みながら言ひつ。

「どうあえず血口紹介から始めようぜ。」

「…分かりました。王都クレメンツの一女、シャル＝クレメンツです。よろしくね、フィオちゃん。」

「私はシャル様のメイドをしております、クルルと申します。以後お見知りおき下さい。」

「わ、私はフィオと言います。よろしくお願ひします。」

シャルは少し砕けた感じに挨拶をし、クルルは丁寧に挨拶した後に軽く礼をした。それをみたフィオはかなり緊張してるので早口で挨拶した。

「さて、挨拶も終わつたことだし…」「レンの話ですよねー!」
… そうだな。」

レンが逃げようとしてる事がばれていたらしく、一人はにっこりと笑いながら黒いオーラを放つている。

「俺がクレメンツを出た理由は一つだ。まず一つはセフイとフィオには言つたんだが、自分の過去を知りたいと思ってな。シャルもクルルも俺が記憶喪失なのは知つてんだる。クレメンツで傭兵やらせてもらつたから金も溜まつたしな。もう一つはクレメンツの力が

届いていない所を見てみようかなーと。王都付近は治安もいいんだけど、少し離れると結構魔物とか盗賊とかでるしな。部隊にいるとなかなか自由に動けないだろ。クレメンツはもともと俺がいなくても平和だったしな。これがその理由。」

「理由は分かりました。ですがなぜ私達に話してくれなかつたんですか？」

「あんま湿っぽいのは柄じゃないんでな。セフィにはちゃんと手紙置いていったる。」

「……皆さんあなたの帰りを待つてますよ。ここにいるクルルだつて。」

レンはクルルを見た。クルルは今にも泣きそうな顔でレンを見つめていた。

「『めんなクルル、必ず戻るから。心配すんな。』

「レン様……。」

クルルはレン達に聞こえないような小さな声で待つてますと呟いた。

そういう訳でレンバルへ着いた。シャル達はクレメンツ

に向かうためリンバルで別れた。そのときに、シャルがレンも一緒につれて帰ると散々駄々をこねたが、リンバルでの用が済んだらクレメンツに向かうというのを約束をして一足先にクレメンツに向かわせたのだ。その約束をしても未練がましい目で見られ続けたのだが…。

「とりあえずフィオの新しい服を買わないとな。」

一人はぶらぶらと街中を歩いていた。

「リンバルってでつかいね！ 人もいっぱいいるし、すこしうる！」

隣を歩いてるフィオは村を出ることほとんどなかつたとの事で、初めて見る街の様子にはしゃいでいた。少し歩くと服屋があつたので、そこに入ることにした。

「いらっしゃい。」

出てきたのは若い女主人であった。

「この子に似合つ服を買いたいんだが。」

「オーケー、じゃあこっちにおいで。」

「フィオが手招きされ、女主人は奥に入つていった。

「フィオ行つて来な。」

「んー…レンは？」

「どうやら一人じゃ不安らしく、レンも一緒に来てほしい様子。

「俺は外にいるよ、服とかあんま分かんないし…あの女性についていけば大丈夫だつて。」

レンはフィオに優しい笑みを浮かべながらフィオを促した。

「……わかつたよ。」

フィオはとぼとぼと奥まで歩いていった。

レンの意地悪…着いてくれてもいいじゃん。と心の中で愚痴を言いながら奥歩いていくフィオ。奥に着くとすでに女主人が何着か見繕つてくれていた。

「あんたはかわいいからどれ着ても似合つと思つよ。」

そういうながら選んだ服の中から、一着手に取つてフィオに渡した。何着か試着して女主人に一番勧められた白のシャツにチェックのついた茶色のスカートを買う事にした。

「今着てる服はどうある?結構ボロボロになつてゐしつが引き取つてあげようか?」

「じゃあお願ひします。」

「この黒い外套はどうするんだい?」

「それは駄目!…持つて行きます。」

「そ、そういうかい。」

フィオにしては大きい声で即答されたので、女主人もびっくりしていた。フィオは黒い外套を受け取り、レンからあらかじめもらつていたお金で支払いを済ますと、レンが待つ店の外に駆けていった。

「レン――ン!」

「ん?」

レンは自分を呼んでいる方角に顔を向ける。その方角には赤い長髪を揺らし、手を振りながら走つてくるフィオの姿があつた。新しい服似合つてゐるなーと柄にもない事を考えつつ、こつちに走つているフィオに手を振り返す。フィオはレンの前まで来たのはいいが、走り疲れたのか息を整えている。

「その服似合つてゐるな。可愛いぞ。」

レンは息を整えているフィオに向けて言つ。レンがそういつた瞬間、フィオはぱっと顔を上げレンの手を掴み「ほんとに！ほんとに！」と掴んだ手をぶんぶん振りながらレンに聞く。

「ああ、ほんとだよ。」と微笑みながらフィオに言つた。

フィオはえへへーと満面の笑みでレンに笑い返した。フィオはふと黒い外套のことを思い出し、レンに返した。

「ありがとな。」レンはフィオの赤髪を撫でながら言つた。

一人はその後も街を散策していた。そうこうしているうちに辺りも暗くなり始めたので、情報収集と夕飯を兼ねて二人は酒場にやつてきた。中はかなり賑やかで各々盛り上がっている。レンとフィオはカウンター席に座つた。

「いらっしゃ…ってレンじゃねえか！」

酒場のマスターらしき人がレンを見て驚き、小走りで近づいてきた。

「よつす。マスター元気にしてたか？」

「あたりめーよーレンより早く死ねねえな。」といいながらガハハッと豪快に笑う。

「隣にいる子は彼女か？」

「そんなんじゃないって。」レンが呆れた様に言つ。

「フィオもなんか言つてやれよ。」フィオにも弁解をしてもらひつために話を振るが、フィオは顔を真っ赤にしながら下を向いてもじもじしていた。

「お嬢ちゃんはその氣らしいぞー。セフィちゃんの時と一緒にだな。マスターはまた豪快に笑うと「ちょいまつてな。てきとーに作つてやるからよ。」といつて厨房に向かつた。

「レンの知り合い？」

少し時間がたつて復活したフィオは首をかしげながらレンに言つ。

「俺が部隊にいた頃、この街に魔獣が大量に現れてギルド…まあ簡単に言つと傭兵だな、そいつらが街を守つてたんだが相手が多すぎて負けそうになつてたとこを俺の部隊が助けたんだよ。その夜この酒場でたまたま飯食つてたら、マスターがすごい良くしてくれてな。それからの付き合いだ。前は俺とセフィで飲んだりしてたからな。」

「そななんだ。セフィって人は部隊の人？」

「そうだよ。セフィは俺の部下で第5部隊副隊長やつてるやつだ。」

「へーじゃあすごい人なんだね。」

「

それからしばらくして料理が運ばれてきた。

「いっぱい食べていけよ！」マスターが厨房から顔をだしレン達にそう言つと、忙しいのかまた厨房に戻つていった。

「だつても。 いっぱい食べな。」

「うん！」 フイオは田の前にある『駆走』を輝かせ食べ始めた。レンはその様子を見て微笑むのだつた。

フイオがご飯を食べ終える前に、レンは情報を仕入れていた。レンの聞いた話では最近魔物の出現率が高くなつてきてていること、それに便乗している盗賊がいるなどだが、魔物の話が圧倒的に高かつた。レンは村の件も知っているため、魔物の動向が気になり始めていた。ここで一回魔物の討伐をしたほうがいいのかもしれないな、などと考え、明日街の周囲を歩いて見ることにしたのであつた。

?

「ん…。」

まだ寝起きでボーッとしている思考をなんとか活動させる。昨日はあのあと宿にフイオと一緒に部屋で泊まつたんだつけ、そんなことを思い出ししながら起き上がるひと試みる。だがなぜか起き上がるうとしてここのに左腕が鉛のように重い。レンはゆっくりと左側をみると、昨日はベッドで寝かせたはずのフイオが隣で寝ていた。それを見てレンは微笑む。レンはフイオの赤髪をそっと撫でた。フイオは熟睡しているのか、すやすやと気持ちよさそうに寝ていた。レンはここで無理やり起こすのは可哀想だと判断し、自らもまた夢の中に落ちていった。

「…………。」「…………。」「…………。」

なぜか体が揺れている感覚と、誰かが自分の事をしきりに呼んでいる声が聞こえてきた。レンはうつすらと目を開けた。田の前にはフイオの顔があり、あらう事か目があつてしまふ。

一人の間には数秒の沈黙が流れ、先に動いたのはフイオだつた。ぱつとレンから飛び離れ、顔を真っ赤にしてあたふたしながら「違うんだよー。レンが寝てたから起こううと思つて！でもなかなか起きてないからレンの寝顔を見ようしたんだけどすごいきれいで吸い込まれるようにこつて！違うー違うー」と矢継ぎ早にしゃべつている。その光景を見てレンはくすくすと声をだして笑つた。

そしてフィオに向かつて言つた。「おはよう、フィオ。」それを聞いたフィオはきょとんとしながら「お…おはようございます。」と言つた。

二人は朝食を取りながらこの後の事を話していた。レンは街の周りを見にいくということをフィオに伝え、その間危ないからフィオは宿で待つてくれといつたが、フィオは「絶対着いていく！」とレンの目を見ながら力強く言い、結局レンが折れて一緒に街の周りを見ることになった。

ドゴン！……ズバッ！……ギャアアアアアアアアア……。

先ほどから魔物との戦闘が続いていた。レンはその体からは想像できないパワーで次々と魔物を切り裂き、粉碎していく。その様子はまさに魔王の如く、圧倒的な力で魔物の群れをねじ伏せていった。しばらくすると魔物もいなくなり、レンは大剣に付着している魔物の血を払い背中に担ぎ直す。周囲は先ほどまでの戦闘のせいで、魔物の無残な死体が散りばめられている。フィオはレンが大剣を扱いだのを見て、レンの服の裾をぎゅっと掴んだ。

「フィオ大丈夫か？」

「…うん。平氣だよ。」

レンは明らかにフィオが無理しているのが分かつていた。フィオの頭をぽんぽんとあやすように軽く撫でながら「先に進もう。」と言った。

レンは先ほどからの魔物の出現が気になっていた。あんなに続けざまに魔物が出現することは滅多にない。しかも違う種族の魔物が協力して襲つてきてている。精霊ならばかなりの知性があるので協力して襲う事もできるのだが、精霊は魔物と違い人を襲うような事はしないはず。何かがおかしいとレンは一人考えるて「レンあの人魔物に追われてるよ！」フィオが指を差し大声で言つ。

その方角を見てレンは一瞬驚いた。確かにこちらに走つてきているのだが、あれは人ではない…エルフだ。

「フィオ、俺の後ろから離れるなよ！」そう言いながら担いでいた大剣を取り構えた。

「そこの中ルフ！！！そいつら引き受けやるからどうぞ…！」

走つてきているエルフはその声が聞こえたのか、「頼みます！」と返した。

その間にどんどん距離は近づき、エルフがレンの横を駆け抜けた。そして数十秒後魔物が目前に迫る。

レンは大剣を真横に振りぬく。先頭の三体は無残にも真つ一つになり絶命した。後ろに続いていた内の三体はレンの力を本能で危険と感じたのか距離をとつたが、残りの一體はそのまま突っ込んでいた。レンは大剣を振りぬいた力を利用し、後ろ回し蹴りを叩き込んだ。突っ込んできた魔物の片方はそれをもろに受けて、横に並んで突っ込んできた魔物を巻き込みながら吹っ飛んでいった。レンは後ろの三体を仕留めるため突っ込む。二体の魔物はレンに向かって炎の塊を吐き出し、もう一体は翼をひろげて羽ばたいた。レンは炎の塊が目前まで迫っているのにも関わらず、大剣を構えながらスピードを上げる。そしてそれが着弾する寸前に大剣で一閃する。だが炎の塊はそこで爆発し、辺りを燃え上がらせた。

フィオはこれまでの戦闘を見てきて、レンの桁違いの強さを肌で感じていた。だがやはり心配なものは心配なのだ。無意識に握り締められていた手を胸に当て、レンの後ろにあつた木に隠れながら先ほど走ってきたエルフと一緒にレンを見る。

エルフは息を整えながら「すゞ…」と呟いた。レンはすでに五体の魔物を蹴散らし、前にいる三対に迫っていた。だがそのうちの一體が炎の塊をレンに向かい吐き出した。フィオたちは当然それを見避けると思っていた。だがあろうことかレンはそれに向かい走っている。…そして着弾した。

エルフは「うそでしょ？」と呆然になりながらポツリと言った。辺りは炎の海になつていて、フィオは「レン…？」と呟く。そ

してフィオの中で何かが壊れた。

「きやああああああああああああああ！」 フイオを中心に圧倒的な魔力が放出され爆発した。周りの木々をなぎ倒し、地面を抉つた。

レンは炎の塊を一閃した後、燃え盛る炎の中を駆けていく。もともとレンの戦闘スタイルは特攻型で、第五部隊隊長だった時も自ら死地に飛び込む人だった。いつも戦闘が終わると部下のセフィリアに泣きつかれ、第四部隊隊長のプラムに怒られながら治癒してもらっていた。

今回もすぐ終わるはずだった。炎の中を駆け抜け終わり、外に出た瞬間「ツツツ！！！！！」レンは後ろを向く。

レンは魔力がないので普段は全く分からぬのだが、それでも感じられるほどの魔力だった。レンに向かって木々が飛んでくる。それを受けながら前を見ると、先ほどのエルフが飛ばされてきた。レンはエルフが飛ばされてくる位置に走り抱きとめた。幸い怪我はしてないが気を失っていた。周りを見ると先ほどの魔物たちは飛んできた木々が突き刺さり息絶えていた。エルフを安全な所に移動させ、自らの外套を優しく掛けてやつた。そして少女に目を向ける。方才の周りには魔力と思われる黒い霧みたいなものが渦巻き、目は虚ろでどこを見ているのかも分からない状態。

「フイオーーー！」レンは叫びながらフイオに向かつて走る。フイオはゆっくりとした動作でレンの方に向いた。目は虚ろで焦点があ

つていなかった。そして手をレンに向かたその瞬間、黒い炎の塊が飛んできた。先ほどの魔物の炎よりは小さいが、レンは本能的に危険を感じ避けた。その炎が地面に着弾した時、天を貫く黒い火柱になり辺りを焦した。レンはその光景にはまるで興味がないかのようにフィオを見続け、足を止めずに駆ける。レンの中には、なぜか恐怖はなかつた。むしろ昔からこの圧倒的な魔力の感覚を知つていて、どこか懐かしい感じが心の中を満たしていた。そしてフィオのもとまで走り抜き、優しく抱きしめた。

そして耳元で「フィオ…俺はここにいるよ。」と語りかけた。そうするとフィオの体から力が抜け氣を失い、同時に魔力も嘘のように消え失せた。

レンはフィオを抱えなおし、エルフの隣まで来ると「さすがについな…。」と咳き、空を見上げるのであつた。

?

レンは困っていた。さすがに一人同時に運ぶのは無理だし、かといつて一人置いていくわけにもいかない。レンは苦渋の末、エルフを起こすことにした。レンはエルフの体を優しくゆすり言つ。

「おーい、起きてくれ。」

しばらく続けているとエルフはうつすらと目を開ける。そしてレンの顔をしばらくみて、起き上がつた。

「私生きてるの?」レンに問う。

レンは無言でうなづいた。

「それより怪我はしていないか?」

「ちよつと体が痛いぐらい。あの子から魔力が流れ出す前に、ちよつと回避したから……そんなことよりこの子は何者?」

「ああ……今分かつてるのは俺の仲間ってだけ。」

それを聞いたエルフは、数秒固まつた後笑つた。

「うふふ……仲間ねえーそつかそつか。」エルフは笑いながら、おもしろい人だわと思った。

それから一人は街に向かつて歩いていた。フィオはレンが抱きかかえている。

「なあ、名前なんていうんだ?」

「私?私はエルフのアルシユナよ。アルシユナって呼び捨てで構わないわ。あなたは?」

「俺はレン、こっちはフイオ、同じく呼び捨てでいいぞ。それでアルシユナはなぜ魔物に襲われていたんだ?」

「ちよつと外に木の実を採りに行こうと思ってね。すぐ近くで採るから」とかも置いて来ちゃって…そんな中魔物達が襲ってきたからびっくりしました。」

「そつか…帰らなくていいのか?」

「んーほんとは帰らなくちゃいけないんですけど、助けてもらつたのでお礼を「そんなの別にいいだ。」

レンがアルシユナの言葉を遮る。

「そうですか…ですが嫌です。」アルシユナは笑顔で言う。

「私がしたいからするんです。だからいいですよね。」

「…勝手にしろ。」レンはアルシユナの笑顔に負けたのであった。

街に到着する頃には日も暮れていた。レン達は宿に帰り、フィオを寝かせる。その後一人は軽くご飯を食べて、その日は早めに休んだ。

「フィオはまだ起きないか…。」

次の日の朝頃に一人は起きたのだが、フィオは寝たままだった。「あれだけの魔力を放出したんだからしじょうがないわ。もう少し寝かせておきましょう。」

「…そうだな。」レンはしづしづながら納得することとした。

「ねえレン、私あの魔物達の動向が気になるの。今まで多種族が群れで襲つてくるなんてなかつたし…村も心配だから一回村に戻つてもいいかしら?」

「ああ、構わないぞ。だが一人でいくんだったら武器くらい持つてないとな。こんな状況じゃなかつたら俺もついていけるんだが…」

「分かつてるわよ。だから悪いんだけビ武器貸してくれない?」

「アルシュナの使う武器は『』だろ?そんなのないぞ。なんなら買つてやるけど。」

「ほんと!助かります!ありがとウレン!」アルシュナはレンに御礼を言いながらはしゃいでいた。

「あれってエルフじゃねえ？」

「私始めて見た。」

「すゞ…」

レンとアルシユナは武器屋に向かっている最中だ。

「来たときはあまり人がいなかつたからな…みんなアルシユナみたいな精霊が珍しいんだ。」

「分かつてますけど…」*れはさすがに。*「

通りすがりの人やアルシユナ見たさで着いてきてる人もいてレン達の周りは人がたくさんいた。

「悪いな…あれが武器屋だ。入ろう。」

レン達は一般的な口を貰い、武器屋をあとにした。

「じゃあ気をつけろよ。」

「色々ありがとう。まだ御礼していないし、村の様子見て戻つたら必ずするね。」

「ああ楽しみにしてる。」

お互い笑いながら別れを告げ、アルシュナは村に戻つていった。

「俺もフィオが待つてるし早く戻りつゝと。」

レンは宿に向かつた。

宿に戻つたレンだが、フィオは依然眠つたままだつた。レンは買つてきた食糧を置き、フィオの寝ているベットに座る。そしてフィオの赤髪をそつと撫で続けた。

「……いつまで寝てるんだ？置いてくぞ？」そう弦を、フィオに向かつて微笑むのであつた。

「セフィリア副隊長、黒い火柱が確認された所だと思われるとこに到着しました。」

「どんなことしたらこんなことになるのよ……。」

目の前には大きく抉れている大地、そこにある木々が跡形もなく吹き飛んでいる。その周りの木々もなぎ倒され無残な姿

の大地がそこにあった。

「総員に告ぐ。」の辺りに不振な痕跡がないか隈なく探します。」

彼女の部下であろう人達は、彼女の命を受け各自行動するのであつた。

「副隊長！ 残念ながら周囲にはなにもないようです。」

セフイリアは少し考えた後、「リンバルに向かう。なにか知ってる人がいるかもしれない。」そう部下に言い放ち、リンバルに馬を走らせる。

(すいじく手が暖かい……。)

その暖かさはゆっくりと胸の中心に染み渡るように感じられ、レンに抱きしめられた時を思い出した。そして徐々に意識が覚醒する。フィオはゆっくりと目を開けた。まだ本調子ではないのか、風邪を引いたときみたいにすごく体がだるく感じられた。そして手のほうを見るとレンが手を握りながら寝ている姿があつた。フィオの容態を見て、そのまま寝てしまつたのだろう。椅子に座りながら上半身をベッドに投げ出し、すやすやと寝ていた。

(レンありがとう。)

フィオは心の中で感謝し、レンが起きるまでレンの寝顔を見るの

であった。

「ん……」

「おはようレン。」

「おふあよつ……」

レンは欠伸をしながら挨拶をする。

（あれ？この部屋って俺とフィオしかいないよな。）

そしてフィオが寝ていたところに向ける。

「おはよう。」

フィオはレンに笑いながらかつ一度いった。

「フィオ！」

そういうながらレンはフィオを抱きしめる。フィオは顔を赤くしながら「苦じこよレン。」といった。

しばらくふたりでまつたりしながら、これまでの事をフィオに話した。フィオはあまり覚えてないらしく、レンが炎の塊に突っ込んだ。

だ所までしか分からぬみたいだつた。

「なんか色々迷惑掛けちゃつたな。」「めんねレン。」

「氣にするな。それよりだるかつたりしないか？」

「ちよつとだけ体が重い感じかな。」

「そつか、飯は食えそつか？」

「うふ。お腹ペツンペツだよー。」

フィオはおなかを押さえながら恥ずかしそうに笑つ。

「じゃあまづは腹！」「りえだな。」「やつ姫こ一人は外に出て行つた。

「マスター。」

レン達は酒場に来ていた。

「ん…なんだレンじゃねえか！」の前から全然顔だもねえからどうか行つたのかと思つたぜ。」

「まあ色々あつてな。とりあえず飯頬むわ。」

「ほじょー。」

マスターは厨房に入つていぐ。少しするとマスターと店員が料理を持つてきた。

「できたぞ。まあゆっくりしていけ。」

それだけ言つとまた厨房に入つていぐ。

「サンキュー。じゃあいただきますか。」

「いただきまーす。」フィオとレンは遅めの朝食を摂り始めた。

「エルフと男か…。」

セフィイはリングバルに到着した後すぐに情報収集を行つていた。やはりリングバルでも黒い火柱は噂になつてゐるようだ。そんな中火柱が確認された後、エルフと男が街に入つてくたとの情報がはいつたのだ。セフィイはすぐにエルフと男の場所を特定するように指示をした。普通精霊が人間の住んでゐる街や村に入る事はない。

(だとしたら契約をしているのか?んー分からぬ点が多くすぎる。

)

セフィイは考えるのを一時中断し、自分も情報収集するため知り合いのところへ向かった。

「美味しかった。」

「そうだね。マスターの料理大好き！」

「そういうとすると作ったかいがあつたつてもんだ！」

マスターはガハハツと豪快に笑いながら答えた。レンとフイオは食後の紅茶を飲んでいた。店員さんは食べ終わった皿を厨房へ持つていった。

「レンからどうするの？」

フイオはレンに問う。

「もうちょっとこの辺を調べたいんだ。だからフイオはお留守番だな。」

「ふー…分かったよ。」

「だけど必ず帰ってきて…。」

「ああ、だからそんな顔すんな。」

「レンを信じる。」

それまで泣きわなな顔でレンを見つめていたが、レンの言葉を聞

き力強く言つた。

「そろそろ出るかな。マスターーお金！」と置いてくぞー。」

レンは厨房に向かつて言つた。

すると「分かった！また来いよー」と厨房から聞こえ、レン達は酒場を後にした。

セフィリアはその光景にしばしごまつた。あの後姿と漆黒の外套間違えるはずがない…そして言つた。

「レン隊長！…！」

レンはいきなり大声で呼ばれ、バツと後ろを向いた。そして言った。

「セフィーー？」

セフィイはレンのもとへ走り抱きついた。

「心配したんですよ。いきなりいなくなつて…何やつてんですか

…」

泣いているのか、途切れ途切れに小さい声でレンに言つた。レンはそれをあやす様に背中を撫でていた。そして隣にいるフィオはどうと、ほっぺを膨らましレンをじーっとみつめるのだった。

?

「それでセフイがビリしてここに？」

あの一件以降レンはセフイリアが泣き終わるまで宥め続け、落ち着いた所で再び酒場に入った。フィオもしぶしぶといった表情で後に続く。

入ったときにマスターから「ついに修羅場か！？」とからかわれたが、レンが苦笑いを浮かべながら事情を説明し、奥のテーブルに座つた。俺の隣にはまだ膨れているフィオ、真正面には先ほどの振る舞いを恥じているのか、真っ赤になつて俯いているセフイリア。

「隊長は黒い火柱を見ませんでしたか？」

真っ赤に染まつていた顔をぶんぶんと振り、真剣な表情で言つ。

「ああ見たよ。」いつが原因だけどな。」

そう入つてフィオの頭をぽんぽんと撫でる。フィオはそれに機嫌を直したのか、くすぐつたそとにしながらも微笑んでた。

「…………ええ…………？」

セフイリアは少し固まつた後に思いつきり叫んだ。

「あれは何なんですか！ってかこの子から魔力は感じられないですか！」

セフィリアはまくし立てるよつて言ひ。

「 そ う な の カ ? て つ き つ す 」 に 魔 力 が あ ん の カ と 思 つ て た け ど 違 う の カ 。 」

「 じ ゃ あ 僕 が あ の 時 感 じ た も の は な ん な ん だ ろ う 。 そ の こ と に つ い て 疑 問 に 思 つ た が 、 ま あ あと で 考 え て み よ う と 頭 を 切 り 替 え る 。

「 フ ォ イ は 僕 が 預 か る 。 あ と あ ま り こ の 件 は 周 り に 言 わ な い ほ う が い い 。 」

「 で す が … 大 丈 夫 、 任 し と け 。 … 分 か り ま し た 。 」

セ フ ォ イ リ ア が 口 を 挟 も う と す る と 、 レ ン が そ れ を 遮 り 笑 い な が ら セ フ ォ イ リ ア に 言 ひ 。 セ フ ォ イ リ ア は し ぶ し ぶ 納 得 し た の だ っ た 。

「 そ う い え ば ま だ 紹 介 し て な か つ た な 。 彼 女 は フ ォ イ 、 今 一 緒 に 旅 し て る 真 っ 最 中 。 」

「 セ フ ォ イ リ ア さ ん で い い ん で す よ ね 。 よろしく お 願 い し ま す 。 」

フ ォ イ は 頭 を 下 げ た 。

「 セ フ ォ イ で い い わ よ 。 」 ち い さ く よ り じ ぐ 。

セ フ ォ イ も 頭 を 下 げ た 。

「そんでこいつらの調査が終わつたらクレメンツに戻る予定なんだ。
」

「ほんとですか！？」

セフィイリアは目を輝かせながら言った。

「ほんとだ。それでセフィにはちょっと手伝つてほしこうが
つてな。」

「なんですか？」

セフィイリアは首をかしげながら聞く。

「最近こいら辺は魔物があさぎる、それがちょっとひつかつて
な。調査に行くからみんなと一緒に来てくれないか？」

「分かりました。すぐに準備します。」

「準備ができ次第、街の入り口集合な。」

セフィイリアは「はい！」と元気よく言った後酒場を出て行つた。

「じゃあ俺らも帰るうか。」「うん。」一人も酒場を後にした。

「待たせたな。」

第五部隊のメンバーは声の聞こえた方向に向く。

「 「 「 「 「 隊長！—！」」」」

「よつす。元氣にしてたか。」

レンは部下に声を掛けしていく。レンが率いる第五部隊は少數精銳で10人ほど、主にクレメンツの領域周辺の治安を守るためにある部隊である。よってほとんどのクレメンツにはいない。各地を飛び回っているのだ。民の間では「漆黒の旅団」と呼ばれ、皆黒い外套を身に着けている。

「隊長そろそろ行きましょう。」

セフイリアも討伐とあっていつも零困氣とは違い、凜々しく言い放つ。

「じゃあいくか。」

「 「 「 「 まいッ！—！」」」」

その声と共に街から消えていった。

なぜこんなことになつたんだろう。

「ハーフは…。」

男は目の前の光景を信じられなかつた。男は盜賊団の幹部で頭から留守を頼まれ、アジトを守るだけの簡単な仕事。そこに魔物が現れるまでは。もう仲間の大半は死体となつてそこら辺に転がっている。残つた仲間は必死に魔物と戦つているが、戦況は歴然だつた。男は幾度となく修羅場を潜り抜けてきた。3人の傭兵に囲まれて殺しあつたりしたし、魔物ともやりあつた。近くの村を襲つては皆殺しにしたこともあるし、金を奪つたため旅の商人を襲つたことも一度や二度ではない。それがなんだこの状況：足が震えて動けない。そんな中次々と仲間が殺されていく。アジトは辺り一面血で染まり死臭が漂つてゐる。そして最後の仲間が殺された。押し寄せる魔物。男は抵抗することも叶わず、命を散らした。

「なんなんだこいつ等…！」

「頭！逃げましょー！」

商人から金目の物を奪い帰ってきた男達は、自分達のアジトであつた洞窟の中を見て語り。そこには魔物の大群。そして仲間の亡骸。男は感じ取っていた、やばすぎる！…！

「逃げるぞ！…！」

そう言い放ち、仲間である4人と逃げる。魔物達も気付いたのか雄たけびを上げ追ってきた。

「うあああ！」

その中の1人が足をもつれさせて転んでしまった。もう近くには魔物が迫る。

「頭つ！…！」

必死に助けを請つがその声で足を止める人たちはいなかつた。頭と呼ばれた男は後ろから聞こえてきた断末魔の声に耳を傾けることはなかつた。生きることに必死だつた。

「「」れで最後つと。」

レンは大剣で最後の魔物を殺す。

「隊長こちらも終わりました」

後ろを見るとセフィリアと部下達が魔物の戦闘を終えていた。

「そうか。みんな大丈夫か？」

部下は全員無傷で疲れてる様子もない。誰に鍛えられてると思つてんですか。とみんなは言いあい、笑いあつた。

「ん…」

レンはそんな中、何かが血の臭いと共に近づいていくことに気付いた。

「なにか来るぞ。」

部下達に静かに言つ。皆はレンの声に従い、戦闘できる体勢に入る。

そして「助けてくれ！」一人の人間が魔物にから逃げてくる。その人間とはさきほど頭と呼ばれていた盗賊団のリーダーだった。しかし無情にも魔物に追いつかれ殺された。

「セフイは俺の援護を！他は残った魔物を殺せ！」このままだと街までいくかもしない、一匹たりとも逃がすなよ！」

レンはそう叫び魔物の群れに突っ込む。

「一人で突っ込むような事はしないでって言つたのに…」

セフイは一人咳き、レンの援護をする為後を追う。

他のメンバーは「「「解ッ…」「」と返答し迎撃体勢をとる。

セフイは腰に差している細身の剣を抜く。刀身は銀色に輝いている。

「雷鳴ツ！」

セフイリアがそう咳くと同時に刀身が青く光り、バリバリと凄まじい音を奏でて雷を纏わせている。セフイリア自身も雷を纏わせ驚くべきスピードで追う。レンはセフイがそうこうして居る内に、魔物と激突する。レンは背負っていた漆黒の大剣で先頭にいる魔物をなぎ払う。だが魔物たちの数は50体は超えていた。何体かは街に向かい後方に消えていったが、信頼できる部下がいるため安心していた。だが残った魔物は次々とレンに襲い掛かる。レンもその力でなぎ払い、切り裂き、粉碎していく。そこにセフイが追いつき加勢する。

(やっぱり隊長はすごいッ！！魔法も使わないのに、使って速度を上げてこる私より速いなんて…)

セフイはそんな事を考えながら魔物を蹴散らしていく。セフイはその俊足を使い手数で魔物を攻め立てる。魔物はセフイの斬撃を受けると、痺れて動きがかなり鈍くなる。そこをレンが一撃で葬る。二人の連携でたくさんいた魔物は一気に数を減らす。そして最後の魔物も叩き潰した。

「セフイ…気付いたか？」

「そうですね…ここまで統制が取れてるのは怪しい。」

「魔物が来た道を行つて見るか。」

「そうですね。」

その会話をしている中、後方での戦いを終えた部下が集まって来た。

「ちよつと状況が分からなくなってきた。お前らは街に戻つて街の警護を。住民にも注意を促しつけ。」

「…はいッ!」「

部下達は急いで街に戻る。

「セフイ行くぞ。着いて来い。」「

レンは駆ける。

「はいッ！」と返答しレンの後を追つた。

「これは酷いな。」

洞窟の中…そこには血の海と肉塊、魔物の死体もあつた。

「おや…まだ人間が？」

奥から人の姿をしたなにかが現れる。レンとセフィリアは身構える。

「あなた達…盗賊の人たちではありませんね？」

「お前はここで何していた。」

レンは男の言葉を無視して問う。

「なにって…見れば分かるでしょう。殺していたんですよ。道具に使おうと思ったのですが、魔物たちが食い散らかしちゃつて…残念です。」

男は気持ち悪い笑みを浮かべ言つた。それを聞いたセフィリアは動いた。一気に男との距離を縮め斬りかかる。

「なにッー？」

その言葉はセフィリアからだった。完全に斬りつけたと思ったのだが、そこに男はいなかつた。

「危ないですねー。そんなことしたら本氣が出ちゃいますよ。

」

男はそこから少し離れたところにいた。そして男はその距離を一気に縮め、セフィリアの頭を両掛け拳を放つ。

「ぐッ！…」

かろいじてそれを避けたセフィリアだが、もう片方の手からの衝撃波を受ける。

「あやあーーー！」

吹き飛ばされたセフィリアだが後ろにいたレンに受け止められる。

「大丈夫か？」

「はい…かろいじて剣で防ぎました。」

レンはセフィリアを立たせ、男を睨む。

「あばらじー…そいつなら最高の材料になるぞ…きみが欲しい…」

男は下品に笑いながら言ひへ。

「つ…」

男は後ろに飛び退く。

「ああまああああ…！」

男がいた場所にはレンの姿があった。男は頬から血が流れていた。

「あんま調子のんなよ。誰がセフィをやるつった。」

レンは静かに言い放つ。

「俺に傷をつけと帰れると思つなよ…！」

そして空氣が変わる。セフィリアはその重苦しい殺氣の中、額に汗を浮かばせ苦しげな表情をしている。

レンは全く氣にしてないようで「御託はいいから…わざわざと来いよ。」と無い放つ。

「人間」ときが一神族に勝てるとおもつなあああ…！」

男は身の丈くらいある棒を具現化し、突っ込んできた。

「ガキンッ！…」

お互いの得物が交わる。先に仕掛けたのはレンだった。相手の棒を受け流し、横つ腹に蹴りをぶち込む。男はそれを避けると、光球を放ってきた。

（避けられねえ！…）

レンは刀身で受け止めたが吹き飛ばされる。

「隊長！…！」

セフィリアがレンに近寄る。

「大丈夫だつて、心配すんな。セフィはどつか隠れておけ、あの殺氣はきついだろ。」

レンは優しく微笑むと「俺も全力ださねえーとやばいかも…そしたら治療してな。」そういうセフィリアの金色に輝く髪を撫でた。

「隊長…。」

泣きそうになるのを必死に耐えて「勝つて下さい…必ず！」と言い残し、洞窟の外にでる。

「セフィにはいつも心配かけるなー。」と一人呟き、セフィのために生き残らないとなーとレンは思った。

「話は終わりましたか？」

「まあね。」

レンはそれと同時に駆ける。男は光球を二つ同時に放つ。

「うらあああッ！…！」

レンは大剣で光球を斬りつけ一つを消滅させ、もう一つは避ける。

「なにっ…！」

男は驚く、なぜ人間如きが魔法を打ち消せるのかと。そう考えているうちに、レンは大剣を振るう。何回か打ち合い、レンは蹴りも織り交ぜる。男はレンの蹴りくらい真横に吹っ飛ぶ。レンはその後を追い駆け追撃する。男も体勢を立て直し、光球を5つ創る。そしてその光球は男の周りをぐるぐると回りだした。レンはかまわず突っ込む。男の近くに来ると光球がレンに向かい襲ってくる。レンは丁寧にそれらを捌きながら男に斬りかかる。男はにやりと笑い、手の中で創った光球をレンに放つ。レンはそれをもろに受け、真後ろに吹き飛んだ。

「がはッ！…！」

壁に叩きつけられ血を吐く。服も破れ、所々血が滲んでいる。これはやばいかもなーと一人思う。男はさらに光球を放つ。

「へッ！」

ぎりぎりでそれを避ける。レンがいた壁は光球が当たり抉れてい
る。レンは息を整え、男に向かつて行った。

「なんどやつても同じですよー！」

男は光球を創る。レンは大剣を男に向かい投げる。

「つーーー！」

男はレンの予期せぬ動きに回避が遅れる。男は光球で剣を防いだ。
防いだのはいいが、目の前にはレンの拳が迫っていた。

「ぐぼつーー！」

男は豪快に吹つ飛ぶ。レンは近くに刺さっていた大剣を抜き男に向かい走る。男は顔を殴り飛ばされ、ぐちゃぐちゃになつた顔で「殺す殺す殺す！ーーーーーー」と叫びながら、先ほどの光球より大きなものを創り放つた。レンは心を落ち着かせ光球を見つめる。

そして「うおおおおおおおおーーーー！」切り裂いた。

最後にレンは男の胸に大剣を突き刺した。

「ぎゃああああーー！」

男は叫びながら血を吐く。

「終わりだな。お前の目的は何だ？」

レンは男に聞く。

「教えてやるよ、負けたからな。あと少しでな…この世界はジークウェル様の…手に墮ちる。魔物の軍勢でなーそしてもう一つの世界もな…お前らはひとつ…みち生きれな「ハツ…いんだよ。」

男は血を吐きながら言った。

そして笑いながら死んでいった。

「なにが起じてるんだ…。」

レンはそう呟き、男に刺していた大剣を抜いた。そして洞窟の外に向かう。もう大剣を杖代わりにしないと歩けないほどであった。そして洞窟の外に出たとき意識を手放した。

遠くから「レン隊長ッ！…！」と叫ぶ声が近づいてゐるのを感じながら…。

?

「はあはあ……レン隊長……重いですよ……。」

セフイリアはレンを担いで街に向かっていた。あの後洞窟に出た時、レンが意識を手放した。セフイリアは体中傷だらけのレンを見て背筋が凍つた。すばやくレンのもとへ行き生死を確認する。そして生きてる事を確認すると嬉し涙が自然と流れた。

もう上官とか関係なく「レンーレンー」と何度も何度も呼び、倒れているレンの胸で泣いた。そしてレンを担いで街を目指したのだ。

「街まで後ひょっと……。」

そして街のそばまで来ると部下の一人が気付き、一緒に宿まで行くのだった。

「レンー。」

フイオはレンが帰ってきたと思い迎えに行く。しかしレンは部下に抱えられ部屋に連れられた。その部屋までフイオは走り「レンは大丈夫なの！？」と近くにいたセフイリアに聞く。

「大丈夫よ。今は疲れ果てて寝てるだけ。」

セフイリアは優しく答えた。レンの部下で治癒魔法が使える人が、

レンに治療を行う。

一人はそれを見ながら「レン…」「隊長…」と同時に呟いた。

次の日の朝。

「レン…はやく起きてよ。早く元気になつて、どつか遊びに行こう。まだ旅も始まつたばっかなんだし。」

フィオはレンの看病をしてた。レンは治癒魔法のおかげか傷のほうは完治していた。フィオはそつとレンの顔を見る。すやすやと疲れを癒すように眠っている。時折窓から風が入り、レンのきれいで短めの黒髪がさらさらと揺れる。フィオはつい見入ってしまい、それに気付き一人赤面する。

(今ならキスとかしてもばれないよね…)

そんなことを考えてしまい、「ぐりッ」と睡を飲んだ。そしてゆっくりとレンに近づく、そしてレンと触れそうな距離まで近づいて、「こんじょ。」びくッ…! フィオはレンから飛びのく。そして「どうぞ…」と答える。入ってきたのはセフィリアだった。

「わるわら交代しますね。」

「そつそつですか… ではお願ひします。」

フィオは若干焦りながら答え、部屋を出て行つた。

「レン隊長…。」

セフィリアは小さく呟いた。

（あの時もつと私に力があれば、レン隊長を助けられたのに…）

セフィリアは自分の力のなさを悔やんでいた。レンがクレメンツを出て行つたあの時から、必死になつてレンに追いつけるように頑張つた。それがただの足手まといにしかならない。ただ純粹に悔しかつた。知らないうちに拳を握り締めていた。そして静かに泣いた。

「起きて早々泣き顔見せんなよ。」

「ツ！？」

セフィリアはすごい勢いで顔を上げるが、レンに抱き寄せられてレンの顔が見れなかつた。

「大丈夫だ。お前を残して死ぬわけねえだろ。それに約束したしな。」

セフィリアはレンの胸で泣き続けた。

あれから数分後、フィオも来て少し話した後、みんなご飯を食べていなったのでいつもの酒場に行くことになった。

「今日は祭りとかあるのか?」

「…そんな行事があるなんて聞いてないですよ。」

セフィリアが片言でレンに返す。三人の周りにはかなりの人だかりができていた。なぜかというとレン達が「漆黒の旅団」だということが街の人たちに知り渡ってしまったのである。昨日レンが大怪我をして帰ったときから、シンボルである漆黒の外套を着ている人が集まっていたので噂になっていたのだ。セフィリアは前々から分かつていたが、レンは全く気付かない。それに加えてレンの隣にいる一人が目当ての人も多い。フィオは長めの赤髪を揺らしながら二コ一コとひまわりのように笑い、レンと手を繋いでいる。セフィリアは長めの金髪を後ろで纏めて、笑ってはいながらレンのすぐ隣を幸せそうに歩いている。どちらも美少女と美女で、注目を集めているのだ。そして皆を引き連れながら酒場に到着した。

「マスターご飯頼むよ。」

「おうー・レンか！セフィちゃんもフィオちゃんもいらっしゃい！
すぐ作るから待つてな。」

マスターは元気のいい声で言い厨房に入つていった。さすがに街

の人たちは酒場までは入つてこなかつた。

「ねえレン、もうクレメンツに向かうの？」

「あー…アルシュナを待たなきやいけないんだ。だからクレメンツはもうちょっとまってな。」

「…アルシュナ？」

二人は首をかしげる。

「二人には言つてなかつたな。セフィイが来る前にエルフを助けたんだよ。そのエルフがアルシュナっていうんだ。」

「あーあのときの！」

フィオは思い出したのか、少し大きな声で言つた。

「なるほど。ですがなぜ待つんですか？」

「なんか助けた御礼をしたいらしくてな。村の様子が気になるからつていつたん帰つたんだ。…でもそれにしては遅いなあ。」

レンは村に戻つたアルシュナのことを想つたのだった。

三人は「飯を食べ終え街を周ることにした。

「ねえねえ！あそこに入つてみようよー！」

フィオが指を指した先には、装飾品がおいてある店だった。

「行つてみるか。セフィもいいだろ？」

セフィリアもレンの言葉に頷き、三人で店に入つていぐ。中には色々な装飾品が並べられていた。

「似合つ？」

フィオが赤の装飾が施されているブレスレットをつけて、レンに見せた。

「ああ、すごい似合つだ。」

レンは微笑みながらフィオに答えた。フィオは無邪気に笑い、はしゃいでいた。ふと隣を見ると、セフィリアがある物を見ていた。レンはその様子を見て、セフィリアが見ていたイヤリングを手に取り、セフィリアにそつとつけてあげた。

「うん。この銀のイヤリングすゞくシンプルだけど、セフィに似合つてる。」

セフィリアはレンの行動に最初は啞然としていたが、すぐに意識を取り戻すと顔を赤くしながら顔を伏せた。

そして小さく「ありがとうございます…」と呟いた。結局レンは一人にブレスレットとイヤリングを買ってあげた。フィオはレンに抱きつき「ありがとう！大事にするね！」と興奮しながら言い、

セフィリアはイヤリングを大事そうに持ちながら「大切にします」と言つて、レンに小さく礼をした。

それからみんなで「ふらふら街を見ながら時間が過ぎ、夕方になつていた。

「そろそろ戻るつつか。」

「うん。」

「そうですね。」

レンの言葉にそれぞれ頷くと、三人は宿に向かつて歩き始めた。二人は先ほどレンからプレゼントしてもらつたブレスレットとイヤリングを身につけ、とても上機嫌だ。レンはそんな一人を見てプレゼントして良かったと、心から思ったのだった。

三人は宿に着くと、中が騒がしいことに気付いた。

そして中に入ると「レン！」そこにいたのはアルシュナだった。

「どうしたんだ？」

レンはアルシユナに問いかける。

「村が魔獣に襲われて！助けてレン！」

アルシユナはまくし立てるように答えた。

「セフイ…皆を集めて街の入り口に集合させてくれ。」

「了解。」

セフイはすばやく部下の所へ行く。

「レン！私もいく！」

隣にいたフィオがレンに言つた。

「…分かった。だが大人しくしてるんだぞ。」

レンは優しく語り掛けるように言つた。

(あの神族が関係してるのか？)

レンは考えるが、答えはでない。

「アルシユナいけるか？」

「はい！村まで案内します！」

そういう、三人は街の入り口まで行くのであった。

?

「準備が整いました。いつでも行けます。」

セフイリアがレンにそう伝える。

「よし。アルシュナ案内を頼む。」

「でもレンとセフイリアの乗る馬はどうしたの?」

アルシュナは疑問に思つたことを伝える。レンとセフイリア以外は馬に乗つて待機しているが、辺りを見渡しても他に馬はない。当然アルシュナは乗つてきた馬を連れているので問題はないが…。

「俺らは大丈夫だ。それより早く案内しないとやばいんじやないのか? それとフィオをできれば一緒に乗せてあげてくれ。」

レンはそっけなくアルシュナに言い放つ。

「分かったわよ。遅れないで着いてきてよ…」

アルシュナとフィオはすばやく馬に乗り、村に向かって行つた。

「アルシュナ、あれか?」

隣で馬に乗っているアルシュナにレンは言つ。アルシュナはそれに頷く。村には結界を張り巡らせているためまだ無事だが、その結界を破壊しようとする魔物の大群が村の入り口にいた。

「結界ももう持たない！早く戻らないと！」

アルシュナはさうこうと叫びながら速度を上げる。

「先行くだ。着いて来いセフィー！」

短くせり言い放ち、魔物に向かって一気に速度を上げた。

「なッ！――！」

アルシュナは驚きのあまり声を上げる。馬と同じ速度で走っているのでさえ尋常じゃないのに、速度を上げた馬を一気に抜いてどんどん距離がひらいていく。あつといふ間にかなり離されてしまった。

「…七十くらいか。セフィ、あの横つ面に雷撃を撃つて貰えるか。

」

「了解。」

セフィリアは右手に雷を纏わせ集中する。レン達があと少しで魔

物と接触できる距離になつたとき、セフィリアはそれを放つた。そこから放たれた雷は激しくバチバチと音を奏でながら魔物達の大群の中に炸裂した。魔物達の半分は気付く間も無く感電して焼け死んだ。そこに漆黒の大剣を手に持つレンが突っ込む。魔物達が紙切れのよう斬り飛ばされる。セフィリアもようやく追いつき、雷を纏いながら細身の剣で援護する。レンは先陣をきつて魔物の大群を蹴散らし、新たな道を作っていく。セフィリアは魔法を使い、レンのフォローをしながら周りの魔物を雷を纏わせた剣で斬り裂いていく。二人の活躍により魔物達は村に入ることもできなかつたのだった。

「嘘でしょ…」

辺りは敵であつた魔物の死体、死体、死体。その中に返り血を浴びて真っ赤に染まつてゐるレンと、その横に静かに佇むセフィリアの姿。アルシユナはまるである魔物の大群が、夢であつたのかのように思えて仕方がなかつた。精靈であるエルフでもある大群を相手するには難しい。それをたつた一人で全滅させたのだ。

「アルシユナ、村にいる人は怪我とかしてゐるのか?」

「えつ…ええ。」

いきなりレンに声をかけられたアルシユナは、びくつと肩を震わせた後短く答えた。

「お前らは周りに魔物達がいるか確認してくれ。」

「 「 「 はいっ 」 」

レンの部下は散り散りになつて周りに散らばる。

「セフイとフィオは村の様子を見てきてくれ。いいよなアルシュナ？」

「構わないわ。」

「俺はここで部下を待つてから村に入るから。」

レンがそう言ひのを聞いたアルシュナたちは村へ入つていった。

レンは返り血で真っ赤に染まつていたので近くの川で血を洗い流し、身なりを整えてから部下と合流した。

村の近くまで来ると「レンー」と手を振りながら走つてきたフィオの姿が見えた。

「村の様子はどうだつた？」

レンは嬉しそうに抱きついてるフィオに頭を撫でながら聞いた。

「村の方は問題ないみたい。ただ結界を張つてたエルフは魔力を使いすぎて疲れてるみたい。」

「そつか。じゃあ村まで行こつか。」

レンはフィオと仲良く先頭を歩き、その後ろで一人を微笑ましく見ている部下と一緒に村までゆっくつと向かった。

「君がレン隊長かね？」

村に着いて村長と思われるエルフに声をかけられた。

「はい。王都クレメンツ第五部隊隊長のレンと申します。」

レンは自分の名を名乗り、軽く礼をする。

「私はここで村長をやっているものだ。村を救ってくれてありがとうございます。」

村長は短くさうこうと深々と礼をする。

「今日はその御礼といつては何だが、精一杯もてなしたい。いいかな？」

「そんな大層なことをしたつもりではありませんし、そんな気を使っていたから大丈夫ですよ。」

「ちよっと待った！」

村長の隣にいたアルシュナがレンに興奮気味に言い放つ。

「まだ私の御礼もまだなんだし、一日くらい平氣でしょ。」

「…分かつた。」短くそう言つと、アルシュナは満面の笑みを浮かべながら「そうになくなづちやー」とい、村長と宴の準備をしに行つた。

「「「「「かんぱーい……」」「」「」」

その夜、村の人たちと共に宴が開かれた。レンの部下も思い思いの場所へ行き宴を楽しんでいる。だがこの一人は違つた。

「むーっ。」「じーっ。」

フィオとセフイリアはある一点を見つめている。その先にはレンとアルシュナの姿があり、二人は仲良く葡萄酒を飲みながら話している。それだけならまだいいが、一人の距離がかなり近い。レンとアルシュナは隣に座りながら話しているが、お互の体がほとんどくつついている状態。それを少し離れたとこからフィオとセフイリアは葡萄酒を片手に不機嫌オーラ全開で見ていた。

「レン、ほんとありがとう。」

「別にたいしたことじゃないさ。」

レンとアルシユナは宴の会場から少し離れたところに座っていた。
宴の最中にアルシユナにふたりで少し飲まない?と誘われたのだ。
もちろんレンは快く了承し、この場所まで来た。

「これからどうするの?」

「畠田にはこの村を出るつむだよ。クレメンツにも歸つて来て
つて言われてるしな。」

「そりなんだ…。」

アルシユナは寂しそうに言つ。

「そんな顔すんなつて、もつ一生来ないわけじゃないしな。アル
シユナがクレメンツに遊びに來たつていいんだぞ。」

「ほんとッ! そんな事言われたら絶対行つちやつよー…それでもい
いの?」

アルシユナは興奮氣味に言い放つ。

「構わないよ。むしろ大歓迎だ。」

レンはそう言つてアルシユナの茶髪をくしゃくしゃと搔き撫でな
がらいった。

アルシユナは顔を赤くしながら「やめしょー。」とおどけた感じ
で言い、しばらべじやれ合つてこた。

「あらがとうございました。」

「もうひとつお手もひかりも良かつたのじやがな…。」

村長は残念そうにレンをいった。レン一行は予定通り次の朝クレメンツに向かうとのことで挨拶をしていった。

「すみません。また近くを通る」とがあったら寄りせてもらいこまゆ。」

「ありがとうございます。では。」

「あのときは歓迎するね。遠慮しないで寄ってください。」

レン一行が村を出たとしたと、「レンシ——!」そつまびながらアルシユナはレンの近くまで走ってきた。

「どうしたんだ?」

「これレン……お守りだから。」

そつまびと少し伸びをしてレンの首にネックレスをつなぎ、た。

「ありがとう。大事にするな。」

「うん。私絶対遊びに行くから…待つてってね。」

微笑みながらレンに向かって。

「待ってる。…じゃまたな。みんな出発するぞ。」

そしてレン一行は村をあとにしたのだった。

?

「着いたか。」

目の前には三大都市の一つ、王都クレメンツ。

「帰国したんだし挨拶でもしてくるか。セフイとフイオも行くだろ？」

レンの言葉に返事はない。

「…どうしたんだ二人とも、村から出てからなんか不機嫌だな。」

レンの少し後ろを歩いてる一人を見つめながら言つ。

「ふんッ。」「そんな事ないです。」

フイオはレンの顔を見ようとせずそっぽを向き、セフイリアはからうじて反応するもいつになく刺々しく言い放つ。レンは首をしげ、ふーっとため息を吐きながら前を向き歩き始める。

「じゃあ挨拶は一人で行くからいい。一人は散策でもしてな。」

「えッ！？」

それを聞いて声を上げたのはフイオだった。その声に反応してレンは再び後ろを向くと、泣きそうな顔をしているフイオの姿と少し寂しそうにしているセフイリアの姿。レンは心の中で何がしたいんだ？と疑問に思っていたが、一人が話さないならしょうがないなど

思い、再びクレメンツに向かって歩き始めた。

そんなレンを後ろで見ていた一人は「レン……」「隊長……」と小さく呟いていた。

レン一行は王宮についたので、部下達には少し休んでから通常勤務に戻れと指示を出し、いつたん解散した。レンはそのまま国王に挨拶すると共に神族と名乗る強者がいたこと、魔物の異常な出現率と統率力、これらを報告しておこうと考えていた。そして国王の間に行こうと歩もうとしたとき、急に後ろから引っ張られた。そして後ろを向くと自分の服を引っ張っているフィオの姿があつた。

「どうした？」

「……レンと一緒にい。」

涙目でレンを見つめ小さな声で言った。

「……そつか。じゃあ一緒にい。」

レンは立ち上がるといフイオの赤髪を撫でた。フィオは控えめにレンに抱きつきながら、おとなしく撫でられていた。

「失礼します。」

レンは田の前に立つて、国王を見ながら言い、礼をする。

「おひ。レンじゃないか。久しぶりだな。」

とても国王とは思えないような気軽な物言いで、レンに顔をかけた。

「長い間部隊を留守にして申し訳ありません。」

「気にすることじゃない。俺もお前が記憶喪失のは知っているし、その記憶を探してるのもな。そもそも第五部隊は独立部隊だし、お前が立ち上げたんだろう。好きにしてくれて構わないぞ。おかげで王都周辺は前より治安が良くなっているしな。」

国王は笑いながら、レンに向かって言った。

「それで報告なんですが、魔物の数が以上に増えています。しかも今まででは考えられないんですが、群れをなしています。少し気になつたんで調査したところ奇妙な男に出会いまして、自分のことを神族と名乗っていました。そいつが死に際にこの世界はジークウェルの手に墮ちると。」

「…そつか。そんなことが…。こつちでも調べてみる。」

「お願ひします。」

「それで隣にいるかわいらしい子は誰なんだ?」

「この子はフィオです。旅の途中で色々あって一緒に行動しているんですけど。」

「なるほど、よろしくなフィオちゃん。」

「よろしくお願ひします。」

「ああ、それとシャルがお前を探していたぞ。会いに行つてやれ。」

「

「分かりました。ではこれで失礼します。」

レンとフィオは国王の間を後にした。

「じゃあ街に出てみるか?」

「シャルのことはいいの?」

「まだここにはいるつもりだし、会つたら長そうだしな。そしたらフィオと散策行けなくなるだろ?」

レンはフィオに微笑みながら言った。

「…ありがと。」

フィオは真っ赤に染まつた顔を伏せながら小さく呟いた。

「「わーーすいこでつかーー。」

あれからレンとフィオはクレメンツを散策していた。フィオは初めて見るものが多いせいか、目をキラキラさせながらはしゃいでいる。レンはそんなフィオを微笑ましく見ながら、久々のクレメンツを楽しんでいた。

「ねえねえレンー今度はあつひ行ってみよつよー。」

フィオはレンの手をとつながらぐいぐい引つ張る。

(フィオが機嫌直してくれたし、つれてきてよかつたな。)

レンは心の中でやう思つていた。

「そんな急がなくとも大丈夫だよ。」

ぐすくす笑いながらレンはフィオと手を繋ぎ歩こんでいった。

「こらっしゃーこらっしゃー。こいつのつごりは甘くておいしいよー買つた買つた！」

「この魚は脂がのつてておこしこよーだまされたと思つて買つてきなー！」

「最高級のお肉だぜ！買つてかなきゃ損するよー。」

レン達は市場に来ていた。辺りは騒ぎにもかかわらず、すうい
活氣で賑わっていた。

「わッ！？」

フィオが人にぶつかりそうになつたところをレンが抱き寄せる。

「人が多いからあんまりきょろきょろ見ると危ないぞ。」

「…分かつた。」

フィオは耳元で聞こえるレンの声に体を強張らせながら小さく言
う。

（私絶対顔赤いよー！）

フィオはそう思い下を向こうとしたが、またぶつかつたりしちゃ
うなと思い直し、前を向いて歩き始めた。

なんとか一人は市場を抜けたので、少し休憩しようとベンチで
ベンチに座っていた。

「なんか飲み物買つてくるよ。フィオはまひつと待つてな。」

レンはさう言つとベンチから立ち上がり、店のまづこ歩いていく。
フィオはレンの言葉に頷き、歩いていく後姿を見ていた。

「すみません。ふどうジュースとコーヒーを一つ貰えます?・?・?

「はいよーちょっと待つてね。」

店員が飲み物を用意するため、奥に入つていった。

「…セフィアいるんだ。」

レンはすぐ脇にある路地に向かつて言つ。するとその路地からセ
フィリアが出てきて「…すみません。」と申し訳なさそうに謝つた。

「どうしたんだ?」

レンは優しく聞いた。セフィリアは下を向いていて答えない。

「お待たせしました。」店員奥のほうから飲み物を持って來た。

「…ほり。」

レンはセフィリアにコーヒーを渡した。セフィリアは顔をあげ、
驚いた表情でそれを受け取る。

「もたもたしてると置いてくぞ。」

レンはそういうながら残りの飲み物を持つてその場を後にする。

それを聞いたセフィリアは驚きながらも、レンの後を追つた。

「そろそろもどるか。」

あれから三人で話したり、街を見て周つたりしていたらすっかり夕方になってしまった。

「うん。」「そうですね。」

一人とも笑顔でレンに返す。セフィリアは合流したときはぎこちなかつたが、三人で過ごしてゐうちに自然と笑うよくなっていた。

「また三人でぶらぶらしたいな。」

レンは自然と声に出してしまった。

「私もまた一緒に行きたい！」「私も…行きたいです。」

フィオは満面の笑みで、セフィリアは控えめに答えた。夕焼けの光が射す中、三人は仲良く王宮に戻つていくのであった。

?

翌朝、レンの部屋にはすゞい勢いで入ってきた一人のおかげです
ごい賑やかになっていた。

「レンー話があるのー！」

「ふあー…。何だよこんな朝から。」

レンはまだ眠たいのか、目を擦りながら声のするほうを向いた。

「げッ…、シャルじゃないか。」

レンは声の主をみた瞬間、眠気がどこかに吹っ飛んだ。目の前に
は怒ってる顔のシャルと泣きそつた顔のクルルの姿が。

「…おやすみ。」

レンは現実逃避に走つたが「帰つてきて声もかけてくれないし、
朝はその態度なのねッ！」「レン様は私に声をかけてくれると信
じておりましたのに…。」

それを聞いたレンは素直に謝ることしかできなかつた。

「おはよう…。」

「おはよーレンー！」

「隊長す、いく疲れて、この顔をされてますが……。」

フィオとセフィリアは仲良く食堂で朝ごはんを食べていると、疲れきった表情のレンが朝ごはんを持って来た。フィオはレンを見た瞬間、にぱッと笑い元気よく挨拶をし、セフィリアは疲れきっているレンを心配する。

「シャルにつかまつてな……朝から酷い目にあつた。」

レンはフィオ達の席に座りながらセフィリアに話す。セフィリアはなるほどと思い、数回頷いた。

「今日は何するの？」

「今日は他の連中に挨拶しようかなーと。フィオ達もいくか？」

「いくッー！」

「私は部下の訓練があるので、隊長も時間があつたら来て下さー。」

「そうだな。後で顔を出すよ。」

そうして三人は会話を楽しみながら、「飯を食べていった。

食事を終えたレン達はセフィリアと別れ、城を少し見て周つていた。

「あれは…、おーいプラム！」

レンは知り合ひを見つけたのか、手を振りながら大声で呼んだ。すると向こうも気付いたのか、こっちに向かつて歩いてくる。その姿はフイオよりも少し背が小さく、160cm前半で髪は淡い青色のショート、白衣のような白いローブを着ている。

「レンじやないか。いつ帰ってきたんだ？」

「昨日かえってきた。挨拶が遅れて悪かったな。」

「それは別に構わない。その子は？」

「フイオって言つんだ。途中色々あつて一緒に行動してる。」

「そうか。私は第四部隊隊長のプラムとこつ者だ。よろしくなフイオ。」

「よろしくお願いします。」

「それで他の連中とは会つたのか？」

「いいや。まだなんだ。」

「ならちよつどこご。皆、修練場に集まるところになつてこ。一緒に行くか？」

「お、お」

そのあと、レンとフイオはプラムの後についていった。

「アキラカホークス...」

「キイイイイイン！・！・！」

おーしゃりしている。今まで何回演習の日だったのか。

修練上では、兵士達が本番さながらの試合をしている。兵士がほとんど来ているだけあって、修練場は人でいっぱいになつてゐる。フィオはレンの隣にいるが、あまりの氣迫に心ひりてあらすといつ感じだ。

「私達の部隊が待機していないと、怪我人続出だからな。」

プラム率いる第四部隊は医療、回復専門の部隊である。他にもダムロス率いる第一部隊は接近戦専門の部隊、キヤロル率いる第二部隊は遠距離専門の部隊、ノウェル率いる第三部隊は魔法専門の部隊などで、それぞれ特化している能力がある。だがレン率いる第五部隊は特化している部分はあるもののほとんどの者が、それ以外の能

力も高い。

レン率いる第五部隊はもともとなかった部隊だったが、ギルドで活躍していたレンがたまたまシャルとクルルを助けたのがきっかけで、王国で傭兵することになったのだ。最初は第一部隊に配属されることになっていたのだが、ダムロスとの演習でダムロスを打ち破り、自ら隊長になる部隊を編成した。そのとき各部隊から何人か勧誘し、編成されたので能力がバラバラになっている。

「ん…あればセフイジjan。あいつも演習するんかな？相手はキヤロルか。」

「キヤロルか…ではないわ！キヤロルは隊長だぞ…実力が違います…お前も隊長なんだから分かるだろ！」

プラムはそう言ひ放つ。それを聞いたレンは笑いながら答えた。

「まあ、見てなつて。」

セフイリアとキャロルが向き合ひている。キャロルは余裕がある

のかリラックスしている感じだが、セフイリアはがちがちになつている。

「よろしくお願ひします。」

「いらっしゃるそよろしくね。」

セフイリアの姿を見つめながら、キャロルは笑いながら返す。そのとき場外から声が聞こえた。

「セフイー！ 繁張なんかしてんな！ 自分の力を信じろ！」

その声のする方角に一人はバツと向いた。他の修練をしている人たちも勢よく向いた。

「レンッ！？」

キャロルはレンがいることに驚いたらしく、自然と口から声を出していた。周囲もレンの登場に驚いているらしく、ひそひそと話しが聞こえる。レンはセフイに向かつて微笑みながら、右手を握り前に突き出した。セフイも数秒遅れてそれに反応し、自分の右手を握り締めながらレンに向かつて突き出した。

「準備はいいか？」

審判を受け持つたダムロスが低い声で一人に言つ。

「いいわよ。」

「大丈夫です。」

二人は短く、ダムロスに伝える。セフィリアはレンのおかげで緊張がほぐれたのか、先ほどより動きが硬くない。

「では…はじめ…！」

戦いの火蓋が切つて落とされた。

最初に動いたのはキャロルの方。腰からさげている二丁の魔法銃をすばやく掴み上げ、セフィリアに向かつて撃つ。セフィリアはそれを知っていたかのように、真横に飛んでかわした。そして自分の得物である剣を持ち力強く唱えた。

「雷鳴ツーー！」

瞬間、セフィリアと剣は蒼い光に包まれる。剣は帶電しているのかバチバチと音をたて、蒼い閃光が走っている。これには皆が驚いた。ただ一人それを嬉しそうに見ているレンを除いて。セフィリアは蒼い閃光を走らせながらキャロルに向かう。

「ツツツ……」

キャロルは尋常じゃないスピードで近づくセフィリアを危険と察したのか、魔法銃を撃ちながら走る。セフィリアはそれを剣で防ぎながらもキャロルに近づいていく。だがキャロルもやすやすと近づけさせない。キャロルはやりと笑みを浮かべながら魔法銃を撃ち放つ。セフィリアはさつきと同様にそれを剣で防ぐ。その瞬間、バンシという破裂音と共にそれが爆発した。

「くッ……」

セフィリアは爆発の瞬間後ろに跳んだが、ダメージはさすがに殺せなかつたのか苦しげな表情を浮かべ、服は所々燃えた後のような穴があいている。キャロルはこそぞとばかりに追撃する。セフィリアは迫つてくる弾を寸前でかわす。後ろから爆発音を聞きながらセフィリアは考えていた。

(「だめだ負けちゃう……」)

その時、ふとレンの言葉が蘇る。

(「自分の力を信じないと……まだいける……」)

田の前に迫りくる弾丸を避け、集中する。だがキャロルは隙をつくらせない。そしてセフィリアに当たると思われた次の瞬間、落雷のような轟音が響き渡り、セフィリアが一瞬強烈な蒼い光に包まる。そして消えた。それを見ていた人達は驚く、そしてその光景を一番間近で見ていたキャロルも同じだった。

「お疲れ……セフィ よくやつた。」

その声でキヤロルはハツと後ろを向く。そこにはレンに抱かれながら氣絶しているセフィリアの姿。そして…

「…勝者キヤロル！」

沈黙の中ダムロスの声が響き渡り、終わりを告げた。

「ん…。」

セフイリアはそつと目を開けた。目を開けるとどうとかの部屋に寝かされてる事を知る。セフイリアは氣だるそうに体を起した。

(負けちゃったな…)

ほんやつとそんなことを考えていると、静かにドアが開く音が聞こえた。ゆっくりドアの方に向くとラムとハイアの姿があった。

「あッ！…セフイ大丈夫？」

フィオはセフイリアの寝ていたベッドに走り寄つて聞く。

「大丈夫だよ。」めんねつ…心配かけりやつて。」

「そんな事ないよ。セフイす」かつたよ…みんなびっくりしてたもん。」

フィオは自分の事のように興奮しながら矢継ぎ早にセフイリアに話す。その顔はとても嬉しそうに笑っていた。

「セフイリア、体の調子はどうなんだ？」

「少しだるいだけです。ラム隊長ありがとうございます。」

「いや、気にするな…強くなつたなセフイリア。」

そういうながいプログラムもベッドに並んでいた。近くなっている椅子に腰掛けた。フィオはベッドの端にしゃぶしゃぶと座った。

「この前の任務の際、途中でレンと合流したそうだな。…その時何かあったか？」

「何がって……こきなつどうしたんですか？」

「いや、あの時のレンの動きは……」

「隊長がなにかしたんですか？」

「セフィイが気を失ったときに抱きかかえたのはレンだよ。すこかつたんだよ。なんか瞬間移動みたいだった。」

「瞬間移動？」

セフィイリアが首を傾げながらフィオに向かって。

「そう……あには一瞬で私達の側から移動した。全く動く気が配すらしなかったのに。」

「…勝者キャロル！」

一瞬辺りは静かになつた。そして一気に歓声が辺りに響き渡る。みんな口々にセフィリアの事を語る。だがキャロルとダムロスは違つた。一人ともレンに近寄り、ダムロスが口を開く。

「レン…二つの間にここまで来たんだ。」

それはキャロルも言おうとしていた事だつたのでキャロルは口を噤んだ。そしてレンの言葉に集中した。

「別に特にたいした事じゃない。ただ走つただけ。」

「なッ…? そんなわけないじゃない…! あそこから配も面もさせないでどうやってここまで来るつていうの…!」

驚くキャロルとダムロスをよそに、レンは笑いながら答えた。

「凹セフィイのことに集中してただけだ。それに気配だつたら消せるし、音も同じ。ギルドにいた時だつて使ってたし、そんな特別な事したわけじゃない。」

そしてレンは先ほどまで浮かべていた笑みを消し、真剣な顔になつた。

「最近魔物の様子がおかしい。それに得体の知らない奴等も動いている。気を抜いてると死ぬぞ。」

「「ツツー？！？」」

（くツー？何この威圧感……耐えられない……）（ぬうツー？まさかここまで力を持つてはいるとは……）

レンがスッと威圧するのをやめると、キャロルは尻餅をつき、ダムロスは膝を地面に着きながら息を整えている。一人とも額にはうつすらと汗が見える。

「セフイリアは日々の任務の中成長している。うかつがしてると抜かれるぞ。」

レンはもう言い残し、セフイリアを抱き上げファオ達に向かい歩き始めた。

「そんなことがあつたんですか……。」

「ああ、ダムロスもキャロルもすこし疲弊していた。それもで別室で休んでいたしな。」

「あんなすこいやつがこんな近くにいたのかーって言ひたよ。」

「隊長の右腕にはまだまだなれそりこないですね。でもいつか絶対になりますッ！－！」

ラムはそんなセフィリアを見て、笑いながらほんやり思つた。

(レン、いい部下を持ったな。セフィリアはもつともつと強くなれるぞ。)

一方、そのころレンは…

傭兵をする前に世話になっていたギルドに寄つていた。

「どうも。」

「ん…、レンじゃねえか！？いきなりビーフしたんだ？」

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど…。」

そう言いながら周りに目を向ける。周りの冒険者はいきなりのレン登場にざわついている。

「おいあれって、漆黒の旅人…レンじゃねえのか？」

「あの漆黒の外套と漆黒の大剣…間違いねえ…！」

「私レンと一緒に依頼受けたいわあー。」

「あなたと行くわけないでしょ…全く。でもかつこいいなあー。」

あちこちで話の種になつていてることに苦笑し、主人に奥で話そうと言おうとした時。

「レンじゃねえかッ…！」

後ろからどこか懐かしい声にレンが振り返る。そこには短い黒髪に燃えているような真っ赤な目の男と、長めの茶髪を後ろで纏めポニーテールにしている美人のエルフの女性の姿があった。

「グレンとアーシュじゃないか！久しづり…！」

「全く顔ださねえーから心配したぜ。」

「でもほんと久しぶりねー。」

三人は久々の再会で少し話していたが、

「そろそろ奥に入ってくれ、仕事にならん。グレンとアーシュも一緒に入れ。」と主人に言われ、笑いながら奥に入つて言った。

その光景を見ていた冒険者達は啞然としていた。そして三人が完全に奥に入つて見えなくなつたとき、ようやく我に返りポツリと呴いた。

「伝説級が三人も…。」

「漆黒の旅人…。」

「紅の悪魔…。」

「魔弓の麗人…。」

「それで何を聞きたいんだ？」

主人はレンに問いかける。レンは真剣な顔で主人を見つめながら言つ。

「最近魔物の様子がおかしい。最近他のギルドとかで噂になっている所とかあるか？」

「やはりか。このごろ魔物の被害が多発していく感じも困っているんだ。最近はスノーグェルで大型の他の魔物が出たとか…。」

「なんだよレンー面白そうな話してんじゃねえーか！俺も混ぜるよー。」

「グレン…。そんな我慢言つちや駄目だつて。」

「いいじゃねえか。なんだアーシュ、嫉妬か？」

「ツ――違いますツツ――！」

グレンは笑いながらアーシュに問いかけるが、アーシュは赤くなりながら顔を背けた。それを見ていたレンと主人は苦笑しながら二人に向かって言う。

「「ほんと仲良いよなあー。」」

「まあ付き合つてゐるし、精霊の絆も結んでるしなッ！」

アーシュを見つめながら爽やかな笑顔のグレン。アーシュはそんなグレンを見つめ返し、ほのかに赤くなっている顔で小さくクリツと頷いた。

それから四人は近辺の街の様子や魔物の事、そしてレンが出会った神族と名乗つた男の情報やら、情報交換をしていたのだった。

「んこん

「失礼します。少しお時間良いですか？」

「ん…。レンじゃないか。どうしたんだ?」

「ギルドに行つて各地の状況などを聞いてきました。やはり魔物の被害が多いみたいで。その情報の中でも、スノーヴェルに大量の魔物の出現…あの神族と名乗る奴の手がかりが掴めるかもしけません。明日スノーヴェルに出発します。」

「すいぶんと急だな。ふむ…では第五部隊は明日から出発か。」

「いえ。今回は遠隔地ですし、セフィリア達はここに残して自分一人で行くつもりです。部隊の全員が抜けると王都周辺の治安が心配です。まして魔物の被害が増えていますしね。」

「そうか…お前には世話になりっぱなしだな。すまん。」

王はやうやく、レンに頭を下げる。

「頭を上げて下さー。自分は自分がしたいことをやつていいだけですから。王様には色々我慢聞いてもらつていますし。」

「…くれぐれも気をつけて行つてくれ。お前の帰りを待つてる。」

「はつ…!…では失礼します。」

レンが王の間から出るとそこにはセフィリアの姿があった。

「行つてしまつんですね……。」

「ああ……。」

あれから一人はレンの部屋に移動していた。

「レン隊長……やはり私では足手まといですか？」

セフィリアの姿はとても弱弱しく、とても副隊長と呼べる立場の人とは思えない。いまにも泣きそうな顔でレンを見上げる。

「全く、お前の泣き虫は最初から変わんないな。」

レンはセフィリアを抱き寄せ、優しく頭を撫でる。

「俺はお前を足手まといだなんて思ったことなんて一度もないぞ。いつも助かってる。それになセフィ、お前の成長はすごいぞ。キャラルだってびっくりしてたしな。」

レンはセフィリアに笑いかけながら伝える。セフィリアはレンの

話をじつと聞いていた。

「俺が第五部隊を任せられるのはセフィなんだ。だからセフィに託した。俺がいない間、王都周辺の安全を守ってくれるな？」

セフィリアはレンの胸の中で縮こまりながら、小さく頷いた。

…それからじろりと、セフィリアは試合の疲れがまだ残っていたのか寝てしまった。レンはその姿を見て微笑み、自分のベッドにセフィリアを寝かせた。

（フィオに明日出発することと云ふことないとな。）

そう思い、フィオに明日のことをお詫びするために部屋を出たのだった。

「…眠いよおー。」

「朝早いから眠いのは分かるけど…」

レン達は王とセフィリア、王宮の人たちに挨拶した次の日、朝早く王宮を出て隣国のワルセイスに向かっていた。スノーグローブに行くためにはワルセイスを通り山を越えなければならない。

「だいぶ歩いたな…。あと少しでワルセイスってところか。」

「あとちょっとで着くの?」

「ああ。もう少し頑張るか…つとその前に。」レンは周りを見渡す。

「おい、隠れてないで出て來い。…殺すぞ?」レンは森の奥に殺氣を放つ。

「あーばれちったか。やっぱレンはすげーな。」

「『めんなさいねッ…レン。どうしてもグレンが着いてくつて聞かなくて。』

森の中からグレンとアーシュの姿がでてくる。一人はレン達の後をつけて追つてきていたらしい。

「着いてくなら普通に付いて来いよな…。」レンは苦笑しながらグレン達に言った。

「レンこの人達は？」フィオがレンの服をちょこちょこ引っ張りながらレンに問い合わせる。その様子を見ていたアーシュが気付きフィオに言つ。

「自己紹介してなかつたわよね。『めんなさい。私はアーシュ。』レンとは昔ギルドで会つて一緒に仕事をした仲間つて所ですね。それでこの赤髪で短髪の人はグレン。一応私は彼と精霊の絆を結んでいるの。」

「そーゆーこつた。よろしくな嬢ちゃん。」

「私はフィオです。こちらによろしくお願いします。それで…
精霊の絆つて？」

「あれッ？ フィオは知らなかつたのか？ 精霊の絆といつのは一種の契約みたいなものだよ。精霊つていうのはもちろんアーシュのようなエルフ、天使、ドラゴンとか色々いる。その精霊と契約する事が精霊の絆つていうんだ。普通は精霊同士でやることが多い。精

靈達はほとんどの目に着かないよう結界をはって生活してるからね。それで契約をしたらどうつことは特にないんだが、本当に信頼する者同士が結ぶものなんだ。」

「そりなんだ。レンありがとう。」フィオはレンに笑顔で言った。

「んじゃ、まちまち行くか。」

「もうだな。じゃあ行くわ。」

レン一行はワルセイスに向かい歩いていった。

「よつやくついたか。」レンは達がワルセイスに着いたのは昼を
だいぶ過ぎた頃だった。

「レンーおなかすいたしこ飯食べようよ。」

「さんせー。俺もお腹すいたー。」

フィオとグレンがレンにぐったりしながら言つ。

「そうだな。俺もお腹減ったし、アーシュもそれでかまわないよ
な。」レンはアーシュに問いかける。

「私もそれでいいわよ。」

「んじゃとりあえず街中で飯屋探すか。」

「「おわりーーー！」」フィオとグレンが大声で店員に言つ。

店員は笑顔で「少々おまちください」と大きな声で言いながら
厨房に伝える。

「それでこれからどうするかだけど、グレンとアーシュはどうするんだ？」

「特に考えてないぜ。お前についていけば楽しいことがあるんじやないかって思つて着いてきただし。」それを聞いたレンはハーアツとため息をいほしながらアーシュを見る。

「しょ、しょうがないでしょーーー！グレンはこうこう性格だし、私にはとめられませんッ！」と矢継ぎ早に言しながら頬を膨らませレンに囁く。

「…じゃあ一人は俺らについてくるのか？」

「ああ、まあモーゆーいつた。」「…よろしくね。」

「俺らはこれからスノーヴェルに向かうわけなんだが…各地での魔物の状況しだいでは変更つてのもありえるな。一応魔物の動向：それに携わる影を調べるために動いていく。」

「大体話は分かつたけど…影つて何なの？」

「あーそこはあんま話してなかつたな。最近各地で魔物の動きが活発なのは知つてるよな。その関係で俺が各地を回つたんだけど、その時に出会つた神族と名乗るやつが気になることを言つていたんだ。この世界がジークウェルが率いる魔物の軍勢によつて落ちるとかなんとか。」

「おいおい、そんなの信じてるのかよ。ありえないだろそんなの。」

「

「そうよ。大体魔物つて操れるものなの？」

「わからない。だがやつの顔は眞実を言つてゐるよつて見えた。それで少し気になつたんだ。あれだけ強いやつがどうしてそのようなことを言つているのかな。」

「レンがそこまでいうなんてな。そんなに強かつたのかよ？」

「ああ、殺されかけた。」

「「ツ！？？」」二人は目を見開いてレンを見る。二人ともレンが殺されるなんて想像もできなかつたのだ。そのような力を持つているレンが殺されると言つていい。レンが嘘をつくような奴ではないと二人は知つてゐるので驚いたのだ。

そしていち早く我に返つたグレンがテーブルに身を乗り出してレンに言つた。「そんな面白いことなんで早くいわねーんだよー。」

「そこは突つ込むとこ違うでしょ……。でもそんなに危ないことを探べるのに私達に話してくれないなんて……。もつと頼りにしてよねツー！」

一人はレンに向かつてまくし立てるよつて言つた。

これにはレンが苦笑しながら謝るしかなかつた。

それからしばらく今後のことみんなで話し合いが続き、とりあえずこの辺で何かないかギルドによつて決めることにした。

「んじゃそろそろいくか。 フイオも疲れてるだろ?」

「…うん。 なんか眠くなっちゃた。」 そういうながらめを擦つているフイオを見ながら他の三人は笑いあつた。

?

「ここいら辺での魔物の状況を教えてもらえるか?」 そうレンがギルドの主人に言う。

「誰だんた? ギルドランクはいくつだ?」

「Sだ。」「S。」「Sです。」レン、グレン、アーシュは三人そろって主人に言う。

「ツ! ?名前は! ?」

「レン。」「グレン。」「アーシュといいます。」

「あの伝説の…失礼。こここのところの魔物の状況だよな。最近は町にも被害が出てきた。ギルドの連中も頑張っているが…。特に町の南の方に城があるんだが、その周りは霧がでていて町の連中が興味本位で行つたらしいんだが、結局帰つてこなかつた。それを助けに行つたギルドの連中もな。だからあそこは誰も入っちゃいけないようになしてる。」

「めちゃめちゃあやしいじゃねーか! …そこに行くのか?」

「…そうだな。少し気になるな。」

「でも大丈夫なの? そんな危険な場所…。」

「誰かが行つて解決しないといけない事もあるだろ? いつまでもほつといたら悪化するかもしだねーじゃん。」

「まあそうだけど……。」

「町の奴も気味悪がつてゐるからな……。俺としても早く処理したいのだが、あいにくこじら邊で活動してゐる連中は一番レベルが高くてBだからな。」

「準備してから明日こじら邊で活動してゐる連中は一番レベルが高くてBだからな。」

「……フイオ起きてたのか?」レン達が明日の準備をし終つて、

宿に帰ってきた時には寝ていたはずのフイオが起きていた。

「…ぐす。なんで置いてったの…。」フイオは泣いていた。多分起きたら一人になっていたので驚いたのだろう。

「…ごめんな。フイオ疲れてるみたいだつたから、ゆっくり休ませたくてな。」レンはフイオの隣に腰掛け頭を撫でながら優しく言う。

しばりべして落ち着いたフイオが口を開いた。

「どこ行つてたの?」と遠慮がちに聞いた。

「ギルドの主人にここら辺の状況を聞いてきた。明日そこへ行って見ようかなーと。」

「危ないところなの?」

「…ああ。だからフイオは「嫌だ!絶対行く!」レンの声を遮つてフイオが言う。

「レンが危ないところに行くのに待つてるのは嫌なの!」フイオはまくし立てるよつて言い放つ。

レンは驚いたようにフイオを見ながら「はあ…。分かった分かつた。でも俺から離れないことこれが条件だ。」

その言葉に「やつたー！」と嬉しそうになっちゃった。その様子を見ながらレンは優しく微笑んでいた。

「フイオ… フイオ朝だぞ。」

「んん…。」 フイオは眠そうに目を擦りながら起きる。

「そろそろ準備して。ロベール降りて、」 飯こしよつ。

「んー…分かつた。」

「おーレン！遅かったな！」レン達が下のロビーに降りてくると、そこにはグレンとアーシュが仲良く朝食をとっていた。

「悪いな。準備もしてたから遅くなつた。」そういうながらレンとフィオはグレン達と同じテーブルに座つた。

しばらく四人で作戦会議していると、レンとフィオの朝食が運ばれてきた。レン達は食べながらまた作戦会議を続けた。

「飯も食い終わったし、ちょっと探検に行つや。おー。」ヒグレンがおしゃらけて言つ。

「グレン…ちゃんと氣を引き締めて行かないだめだよ。」アーシュがグレンを見ながら注意する。それをグレンは「わかつたわかつたー。」と返した。

「やつと着いたぜ。んじゃ開けちゃいましょうか。」グレンは勢

く。
「大丈夫かフィオ？もうすぐ着くぞ。」レンは優しくフィオに聞く。

「うん。でもちょっと怖いよ。」そいつでレンの服をギュッと掴んだ。レンは微笑みながら「大丈夫、俺がついてる」と答えた。

「やけに静かだな…。」レンがポツリと呟く。

4人はあの後すぐに森に入つていった。ここら辺に限らず、夜はとても暗く魔物が活発に動くため冒険者や旅人、商人などは朝方に行動する。だが城の近くでは太陽の光が雲によつて遮られている。

「確かに魔物もではないのはおかしいわね…。」

「まあ城に入れば分かるだろ。」不安そうに言うアーシュとは対照的にグレンは気の抜けた返事をする。

いよく入り口である門を蹴破った。

「もおーーちゃんと開けれないの!?」アーシュはグレンに怒りながら言つ。

「そんな細かいこと気にすんなって。この城すげー血の臭いがするな。もしかしたらゾンビとかホロウができるかもなッ。」

「そんな暢気な事いつてられないかも知れないぞ…。結界が張られた。俺達を逃がさないつもりらしい。」

「えツ!?」「なにツ!?」アーシュとグレンはレンの言葉に驚き、レンを見る。それからレンは冷静に一人に伝える。「今回の親玉は手ごわいかもな…。一人ともホロウは倒せるよな?」それに対し一人はゆっくり頷く。「なら安心だ。…団体さんがお出ました。二人とも死ぬなよ。」

「ようこそ我が城へ…」その不気味な声が辺りに響く。「歓迎するぞ。」声と共にゾンビ、ホロウがいっせいに姿を現した。その中でレンはフィオに「俺の近くから離れるなよ。」と諭すように優しく伝えると、背負っている漆黒の大剣を抜き構えた。

?

「うおおおおおおおおおおおおお…！」その声と共にグレンの拳がゾンビの頭に命中し、ゾンビは成すすべもなく絶命した。グレンの前後左右頭がグシャグシャなゾンビが無数にある。

「ぎやあああああああ…！」その横でアーシュが魔法で具現した『』を使い、実体のないホロウを打ち抜いていく。

「だいぶ減らしたんじゃね？」「後ちょっとね…。」お互に背を預ける格好で一人は現状を把握する。「もつめんどくせーな。つてなわけでリミットはずしちゃつていい？」「ダメよ！あなたのリミットはずしたらフイオちゃんにまで影響があるでしょ！」「ちえツ…んじゃ行きますか。」グレンとアーシュは迫つてくる敵に意識を向けていた。

「大丈夫か、フイオ？」レンは怖がるフイオを撫でながら優しく問いかける。

「うん。レンが守ってくれたから大丈夫。」レンの問いかけにぎこちないながらも精一杯笑顔を浮かべながら言つ。

「そつか… フイオは強いな。」レンもそれを見てできるだけ不安が取り除けるよう、笑顔を浮かべフイオに言った。

「やつと終わつたぜ。ってレンー」これレンが全部やつたのかよ!」グレンが見ている周りにはグレンとアーシュが相手した数よりも多い「骸が転がっている。遅れてやつてきたアーシュは驚きのあまり固まり、呆然としている。

「ああ。」レンは短くグレンに囁く。

「じうじってホロウも相手したんだよ!」グレンは興奮しているのか声を荒げてレンに向かう。

「なんかこの剣は特殊みたいなんだ…。だが俺はこの剣のことも覚えてなくてな。」レンは申し訳なさそうにグレンに言った。「それよりも先を急ぐ。今回の敵は大物らしいからな。フイオもいるから早めに終わらせたほうがいい。ここからでも相手の瘴気が感じられるしな。」「まあそれは俺も感じてたし賛成だ。じゃあ先に進むか。」

「じつかし!」暗いな…。」

「そうね…。薄気味悪いわ…。」

三人はそれから奥のほうに進んでいた。先頭はレン、その後ろにレンの服をぎゅっと掴みながら恐る恐る歩いているフィオ、その後ろにグレンとアーシュという形で進んでいる。周囲は薄暗く、所々に人の亡骸が転がっている。中には白骨化していない亡骸もあるので、レンは最近調査に来た冒険者かも知れないと感じていた。

「お、なんか分かれ道だぜ。レンビツするよ。」レン達の見つめる先には上に上っていく階段と、下につしていく階段がある。「俺は上に行きたいんだよなー。瘴気が強いし原因はそこにあんだけ。きっと親玉はそこにいる。」グレンはいつになく真剣な顔でレンに向づ。
「俺もそう思つが…。グレンはそれでいいのか？危険なのはお前も分かってるだろ？」

「ああ…、やっぱかつたらコニシトをはずす。この状態であれを相手にするにまちどきつからな。」そう笑いながらレンに言つた。

「…死ぬなよ。」レンは短くそつそつと階段を下つていく。

「俺が死ぬかよ。」レン達が下つていった後姿を見つめながらボツリと呟いた。「んじゃアーシH、ちょっとくら鬼退治にいきますかあー。」

「そうね。私達もこきましょ。」そう言い、一人は階段を上がりついた。

「ねえレン、グレン達大丈夫なの？なんで一緒にいかなかつたの？」フイオがレンの服をぎゅっと握りながら不安そうに聞く。

「あいつらは強いから大丈夫だよ。この下に微かだけど何かの気配が感じられるんだ。その確認かな。それが終わつたら応援に行こう。」それを聞いたフイオは安心したようで、レンに元気よく「うんッ！」と返事した。

「おっと、フィオちょっと下がつて。」レンは立ち止まり、フィオに言つ。すると奥から魔物が出てくる。「最初に出てきた奴よりはまともな奴がでてきたな。奥にはなにがあるんだか…。まあいや、さつさと来いよ。」レンは漆黒の大剣を構え、魔物達に言い放つ。言い終わると共に魔物達は一気に押し寄せてきた。

レンは冷静に、先頭にいる魔物を横に一閃する。先頭にいる魔物は咄嗟に反応するも、レンの大剣の方が速く魔物に入り真つ二つになる。その攻撃に怯んだのか、魔物達は少し距離をとる。「おいおい、こんなんでびびつてどうするんだよ。」レンは不敵に笑いながら一気に殺氣を放つ。魔物達の中には動けずに固まっているのもいれば、徐々に後退しているものもいる。「ギヤオオオオオオオオオオ！」その中から一体が錯乱したようにレンに突進する。レンはその光景を冷めた目で見ながら大剣を振り上げ、一気に振り下ろした。

「ぐー、シ……！」

その一撃は魔物もろとも床を抉つた。魔物はもはや原型を留めてない。辺りには魔物の肉塊が飛び散り、酷い血の臭いが周りにたちこめる。レンはその中を悠然と歩く。

「やつせと終わらすぞ。」そっぽつりと冷酷で、悪魔、いやまるで「魔王」のように笑いながら言つた。

?

「レン達はあの気配のところに行けたのかな。」

「行けるだろ。あのレンが着いてるんだ。心配すんなってアーシエ。」グレンとアーシエはレン達と別れてから階段を上り、先へ進んでいた。

「ここの中に入ってるな。」「ええ、それにしてもすごい瘴気ね…。どうするの?」「そんなの決まってんだろ!…」

「勇者御一行ただいま参上!…」グレンは扉を開け放ちながら大声で言った。その瞬間グレンが吹っ飛ぶ。

「グレンッ!…」アーシエはグレンに駆け寄る。

「あぶねーッ!死ぬどこやつたるー!」グレンは起き上がり吹き飛ばした張本人に向かつて言った。そこには椅子に座つて殺氣を放つている人とは思えないものがどつしりと座っている。

「ほう、あれをくらつて立てるとは…。」その声は低く、周りに響き渡る。「なかなかやる奴が来たようだ…。おい、二人をもてなしてやれ。」そういうと部屋の奥から影が一つ。二メートルぐらいの巨体で、四足歩行、目は三つあり、その目は赤く充血しているかのように真つ赤に染まっている。その姿は歪な形をしており、目の

間隔や腕があるところがおかしく、まるでなにかに無理矢理くっつけられたような感じだ。

「お二お二……、なんだよ!」
「

「合成獣…キメラだよ。おまえらは知らないのか。たしか天から
来たとかいう奴が置いてきおつた。あいつらのやりたいことは分か
らぬがな。」

「天からだと…？」グレンとアーシュは一瞬考えようとしたが、魔物の主の声によつて遮られた。

「お喋りはここまでだ旅の者。」そういうつて手を叩いた。その瞬間魔物はものす」とスピードで一人に迫る。

「ちッ！！」グレンはキメラのスピードに危険を感じたのか、アーシュを抱えながら咄嗟に飛び退く。少し遅れてグレン達がいたところをキメラの前足で叩きつけるように殴る。「ドゴッ！！」床は激しい音を立てて陥没した。どうやら魔物の主が結界を張っているらしく床が抜けないようになつているらしい。キメラはじりじりとグレン達の方へ向く。その目には意思は感じられない。

「アーシエ行けるか?」

「大丈夫よ。終わつた後でじっくり説教してあげるんだから！！」
そう言いながら『』を具現化し、キメラに狙い放つ。キメラはそれに

反応して素早く回避する。そのままグレンに突っ込む。

「ハーッ…！」グレンはキメラに向かい構える。キメラはそのまま鋭い牙で噛み付こうと突っ込んでくる。

「ハーッああああ…！」グレンはそれを横にかろつじて避けながら側面を殴りつける。が、それを耐えながらキメラは太い尻尾でグレンを叩きつけ吹き飛ばす。アーシュはすかさず魔法の矢を放つ。キメラは反応するも、流石に全てはかわせなかつたのか所々流血している。

「ぐッ…」壁に叩きつけられたグレンはよろよろと立ち上がる。「クソッタレ…。やりやがったななッ…！」グレンはポキポキと骨を鳴らしながら叫ぶ。明らかに以前と雰囲気が違う。紅かつた目は瞳孔が開き、そして殺氣を垂れ流しながらキメラを睨みつける。「アーシュ…、わりいーな。ちつと解放するぞ。」「私は大丈夫だよ。グレンに一生ついていくって言つたでしょ。」そういうながらグレンに優しく微笑んだ。

「わやおおおおおおおお…！」凄まじい咆哮、それと共に合成功がグレンに迫る。

「ナメんなよおおお…！」グレンも合成功に向かつて走り出す。

合成功はグレンに向かい飛び掛る。グレンはそれが見えてるのも関わらず走り続ける。合成功がグレンの顔に噛み付く寸前、グレ

ンが消えた。

「ほおッ…。」魔物の主は興味深そうにグレン達を見つめる。

「ギイ！？」合成獣はグレンに気付いたのか声をあげる。その時にはもう遅く、グレンの拳が合成獣の横っ面にめり込む。合成獣は成すすべもなく吹っ飛ばされ壁に激突する。そこをアーシュの弓から無数に放たれた魔法の矢が突き刺さる。

グレンとアーシュは合成獣の方を向いた。そこには至る所から血を流し、血だまりを作っていた。

「ハーハツハツハツ！！！」急に笑い出す魔物の主。

「次はお前だ。」グレンは魔物の主に指を指しながら威圧する様に言い放つ。

「ようやく我を楽しませてくれる様な奴が現れたか…。」魔物の主は邪悪な笑みを浮かべながら一人を見つめる。

「うるせー…、消えろ。」グレンは魔物の横に素早く走りこみ、拳を叩き込もうとした。「ぐうッ！！」だがグレンの拳は何かに阻まれ、逆に魔物の手から放たれた魔法弾を至近距離から放たれ直撃する。「ぐうううつ…。」それをなんとか手をクロスさせ防ぐが、アーシュの所まで押し戻された。

「急ぐな、急ぐな。どうせ死ぬんだ。今生きてる」と精一杯感じておけ。」

「ちゅーしーのん…シ…!?」「きやシ…!?」これなり瘴気、殺氣とも魔物から溢れる様に出る。それによりグレン、アーシュ共に驚く。

?

「ゴオオオオオ…。」

「あやッ！？」突然の揺れとともにこぐる圧迫感、その違和感を感じてフイオ驚き叫んだ。

周りには無数の亡骸、そのなかで血濡れのレンは大剣についた血を払いながら呟く。「上位にかあつたな…。ちつと急ぐか。フイオ走れるか？」フイオはレンの言葉に頷き、レンのもとへ走り寄る。

「じゃあ行くぞ。」「うんッ！」そして一人は奥へ走つていった。

二人は奥まで走りきった先には人骨と思われるような骨の山があつた。レンはフィオが震えるのが握られている服の裾から感じ取れた。「フィオ…俺がついてる。」そう言いながらレンはフィオの頭を撫でた。フィオはばつとレンの顔を見上げた。そこには笑いかけるレンの姿があった。それにより震えは止まり、更に力を入れギュッと裾を掴んで小さくレンに「ありがとう…。」と答えた。

「誰かいるのか…？助けてくれ…。」人骨の山の奥からかすかに声がするのを一人は確かに聞こえた。一人はすぐさまその声のする方に駆け寄る。すると臨戦態勢の女性が細めの剣、レイピアを突き出し威嚇していた。その奥には重症の男性が一人、その人達を必死に治癒してゐる女性がいた。

「どうした？俺らはギルドで依頼を受けてきたんだが。」「わ…私達は助かったのか…。」威嚇している女性は震える声でそう問い合わせる。よく見ると彼女が持つてゐるレイピアも震えてるのが見て分かる。「ああ…。大丈夫だ。そっちの男は平氣なのか？見るからに重症だろ。」そう言いながら男一人に駆け寄る。一人とも血だけで息もかすかにしているだけで、もういつ死んでもおかしくない状態だつた。治癒している女性はかなりの時間回復魔法を使い続け

ているのか、酷く汗をかいていて疲れきっている状態だった。

（これはもうもたないかも知れないな…。）レンは率直にそう思つた。「ねえ…レン大丈夫なの？」レンの後ろにちょこんと座りながらレンに聞いた。そこでレンは思いつく。「フィオ…お前が治癒してやれ。」レンの予想外の言葉に驚く。「できないよッ！そんなこと！」レンはおろおろしているフィオの肩を掴み、向き直らせ、しっかりとフィオの目を見つめながら言う。「フィオならできる。俺を信じろ。」フィオはしばらくレンの目を見つめ、決心したように微かに頷いた。

「フィオ、目の前の人達に集中して傷を治したいって想うんだ。その想いが魔法になる。」「うん。分かつた。」フィオは目を閉じ集中する。（この人達を助けたいの！お願い！）するとフィオの手から優しい光が現れる。（これで平氣だな…。でも魔法の使い方なんか俺が知るわけないのに…。なんでだ？）

レンが考え込もうとしたとき、女戦士の言葉に遮られる。「む…無詠唱だと…。信じられない…。」「詳しい説明は後にしましょ…。まずはここから出ないと…。」治癒していた女性が疲労の色を滲ませながら言う。「そうだな。まずは脱出だな。あんた男の人担げるか？」「あ…ああ。問題ない。」「とりあえず地下から出口まで行こう。問題は結界だな…。」そう呟いた。

「くそッ！化物がああ！」グレンは魔物の主に流れるように拳、蹴りを放つが素早い動きでかわされ、時には防御される。そこにアーシュの放った弓が当たる。だが弓が突き刺されることはなく、なにか不可視の壁があるようにはじかれる。魔物の主はグレンの一瞬の隙をみて右足を魔力で強化しての蹴りを放つ。「グツツッ！？」グレンはからうじて防御したが吹っ飛ばされ壁に激突した。魔物の主は続けて魔力玉をいくつか作り出し、グレンとアーシュに放つ。「ツツツ！？」「アーシュは避けようと試みるが数が多くて避けられなかつた。

「クツクツクツク…。」これまでかのー。」

「アーシュ…、大丈夫か？」体中から出血し、息も絶え絶えになりながらグレンはアーシュに尋ねるが、反応がない。アーシュは体中から出血し、気絶しているのが見て分かる。（まじでやばいぞ…、

「ここで俺が完全解放したらアーシュが…、クソッ！－チエックメイトかよッ！」グレンは忌まわしげに魔物を睨みつける。

「そんなに睨むでない…。安心しろ、二人ともあの世に行かしてやる。」そう言ひと魔力で創つた二つの槍を両手に持つ。「ではサラバだ、旅の者。楽しかったぞ。」そう言いながら槍を放つた。

（やベツ！まにあわねえ！！）グレンはアーシュのもとに駆け寄りうとするが、放たれた槍のほうが速い。「アーシュエエツツツ！－！」グレンはアーシュにあらん限り手を伸ばすが、その思いは届かず槍が命中し…

…ていなかつた。「大丈夫かグレン？」「レンツー？」アーシュの前に立ちはだかり、大剣で槍を防御していた。「よッ…。つーかおまえボロボロじやん。」「ツー！完全解放してたらこんなやつ！！」「お前が完全解放したらアーシュもフィオも被害を被るだろうが。」「ちツ！まあなんにせよ助かつた。ありがとな。」「ああ、下でフィオ達が待つてゐる。アーシュをつれて早く行け。あいつの相手は俺がする。」

「わっこ…。仮をつかう。」やっこながらマーシュを抜き、
部屋を出て行く。

「待たせたな。」
「よっこ、どうせあの者どもは逃げられないんだ。あとでじつ
くつ殺してやる。」

「それなら大丈夫だ。」そう言いながら手に持っていた大剣を魔物の主に向けながら、「俺があんたを殺すからよ。」と冷たい笑みを浮かべた。

?

「グレン、アーシュ！」 フィオはアーシュを抱え、フラフラと歩いてくるグレンを見かけると大声で叫び駆け寄る。

「…よう。ちつと休憩していいか？」 グレンは血だらけのまま座り込んだ。

「ちょっと待ってって。アーシュが終わったら次はグレンねッ！」
そういうながらアーシュの治癒にかかる。「おい…魔法つかえるのかよ！」 グレンは驚いた顔でフィオを見つめる。「うん。さつきレンに教わったんだ。」（おいおい…無詠唱を一瞬で覚えるんかよ。
流石レンの連れだな。） ぼんやりとそんな事を考えながら意識を手放した。

「おいおいどうした。そんなものか…。我を失望させるな。」 そう言いながら魔物は魔法弾を放つ。

「ちいいいッ！！！」 初撃を大剣で切り裂き、次の魔法弾を紙一重でかわす。

魔物とレンが激闘している所は部屋としての面影はなく、破壊しつくされていた。それでも崩壊しないのは魔物の結界があるからであろう。

魔物は高らかに笑いながら魔法弾を生成している。対象的にレンは息を切らしながら魔物を睨んでいる。（あいつ隙がねえ…。隙を伺うために回避してたが待つてたらこっちがやられるのは目に見えている。それならこっちから仕掛けるか。）レンはこの状況を冷静に分析していた。

そして行動に移す。レンは魔物の横まで素早く移動、大剣で魔物をなぎ払う。が、魔物の不可視の壁により防がれた。

「凄い速さじゃな…。だがこのバリアを何とかしないとなああああああ！」 魔力のこもった蹴りが放たれる。（かわしきれねえ！？）

魔物の蹴りがレンの腹にめり込む。

「グはツツ！…！」

レンは凄い勢いで壁まで吹き飛ばされ、呑きつたられる。レンは口から血を吐き出し、頭からもおびただしい量の血が流れ出す。

(やつべー … 。 つえー … 。) 「 ふらふらと立ち上がる。

「 ほう … 。 我の全力の蹴りをくらっても立てるとは … 。 なかなかやるではないか。 」 「 がほッ … 。 つえーじゃねーかよ。 」 レンは血を吐き出しながら、魔物を睨み言ひ。 「 言うではないか小僧。 」 そういう言いながら、魔法弾を創りだす。 そしてレンに向かい放つ。

レンはかるくじてそれを避ける。 「 遅くなってるのではないか? 」 「 シッシッ ! — ? 」 レンの目の前には魔物の姿があり、蹴りが顔面を捉えた。

「 シッ ! — ?

続けざまに拳、蹴りとレンに放たれる。

「 … これで終わりだな。 」

嵐のような攻撃が終わった時、そこには血まみれのレンの姿があるだけだった。

「よし。みんな治癒し終えた。」フィオは汗を拭きながら呟く。

「大丈夫か？ずっと治癒し続けたじゃないか。」助けた女性の一人がフィオに言う。その横に疲れきって寝てしまった、女性が隣にいる。

「大丈夫だよ。これからレンを助けに行く。」「馬鹿かッ！？あの殺氣がわからないのか！？」「でも…。」

「「ツツツ…！」」

一人にいきなり襲い掛かる圧力。それだけで一人は大量の汗をかき、へたり込む。

「ニッ殺される…。」「ううう…。」

一人はそこで氣を失つた。

?

(俺は死んだのか?...くッ...頭がこてえ...)

「レンー...はー...やー...へー...」

「遊ばせりよー...レンー...」

「レンー...とー...つシ...」

「グハツー?...いきなり抱きついてくるなー!びつじどもー!」俺
と戯れている子供達。なんか楽しそうだ。みんなでわいわい遊んで
いる風景が見える。

(なんだ...?俺はこの光景に見覚えが...、くッ!...なんなんだこ
の頭痛は!—)

「レン様、おはよ~」わこます。朝食ができるままで。」「だれかは分からぬ」がとても美人な人が俺を起こすと体を揺さぶつている。

「んあー……、おはよ~イリア。もう朝か……。」

(イリア……。どうかで……。ぐうう……思って出でたりすると頭があ……割れるう……。)

「わあ、行きましょう。今日もいい天気ですよ。」そいつ言しながら俺に向かって、まるで太陽のように微笑んだ。

「おお……レンじゅねーか!」「おまえその馴れ馴れしい言葉遣

い直せよな。レン様こんにちは。」最初の男性はいかにも軽そうな感じの雰囲気を醸し出しているが、その両手には剣、いわゆる双剣が握られている。もう一人はいかにも厳格という言葉が当てはまるようないい男だ。その手には自分の身長くらいありそうな長刀を持っている。

「おう、クロスにブライト。鍛錬頑張つてるなー。それとブライト、クロスみたいに碎けた感じでいいっての。」そう言つと長剣を持つている男性の肩を叩く。「そんな…、魔族を束ねる長ですよ！？無理です！」焦りながら俺に言つ。「レンが言つてんだからいいじゃん。」「お前は…。」ブライトはクロスを見ながら頭を抱える。それを見ながら俺が笑つている。

(さつきからなんなんだ…。これは俺の記憶なの…か…？グガア…、さつきから痛みが増して…。)

「俺らの方が圧倒的に人数が多いんだ！！殺しちまえ！！」敵の親玉らしき男性が大声で叫ぶ。

「俺とブライトで雑魚を潰して、レンとイリアの道をこじ開けるんねー。」クロスがふざけながらレン、イリア、ブライトに言つ。「そうだな。さつさと蹴散らすか。」「レン様には指一本触れさせませんから。」「

「お前、手を出さなくていい。」

「「「ツツツツツ！――！？」？」

(レン様がキレた…。それにしてもすごい殺氣、意識を保つのに精一杯…。)

(まじですかー殺氣。さすがレンだわ。)

(グツ。すごい。)の殺氣。

俺の髪と瞳は黒から紅に変化し、瞳は瞳孔が開ききり、具現化した魔力が俺の周りを漂う。それからは一方的な殺戮が始まる。

「ちーーとーー。残りを殺してくるかの。」魔物は歩き始め、結界を解いた。そしてフィオたちのもとへ行こうとした時、後ろから妙な音を聞いた。そして後ろに振り向いた。

「なあッ！？」

そこには血だらけのレンが立っていた。一人は無言のまま見つめあう。（なッなぜあいつは立てる！？本当に人間なのか？いや人間ならとっくに死んでいるはず…ならあいつは何者なのだ？）魔物は驚いている中、今の状況を考えていた。

長い沈黙の中、最初に動いたのはレンだつた。だがそのスピードは遅い、だが一歩一歩着実に魔物に近づく。顔は俯いていて良く分からぬが、危険と判断したのか魔物は下がりながら魔法の槍を創る。

その間もゆっくり魔物へ近づくレン。そのレンに対して、魔物は創った魔法の槍を放つ。魔法の槍はレンに向かう。

「…」「何ッ…！？」魔物はレンに直撃だと思っていたが、レンにあたる直前槍は消失し消え去つた。（なぜ魔法が消失した！？）魔物が驚いている間も、レンはゆっくり近づく。魔物は無意識にあとずさる。「バチバチイイ！」「くッ…！」だが結界らしきものがそれを許さない。（これはこいつが創ったのか！？）魔物は本能で魔法球をいくつも創りだす。（こいつは危険だ！！ここで殺さなくては！）そしていつせいにレンに放つ。「なッ…」レンは魔法球を物ともせず、魔物の前まで移動していた。そして初めて下を向いていた顔を上げる。レンの顔は瞳が紅に染まり、瞳孔が開いている。それに一番目を引くのは口元、まるで目の前の敵を待ち望んでいたかのように笑つているが、すごく冷たい笑みを浮かべている。

そして無慈悲に大剣を振るう。その大剣は魔物を守るバリアもろとも切り裂いた。魔物は言葉を発する暇もなく絶命した。

「ククク…、ハーツハツハツ…！」レンは笑つた。なぜだか分からぬが、気分が高揚していた。記憶喪失で失つたものを取り戻せたかのように。

すると誰かがこつちへ歩いてくる気配を感じた。その方向を見ると血塗れのレンが歩いてくるのが見えた。「レンッ！？」「斐オは急いでレンに駆け寄る。「レン大丈夫なのッ！？」「ああ…大丈夫だ。みんなは大丈夫か？」「大丈夫みたいだよ。それよりレンだよ！つて傷がないじゃん！」「ああなんか勝手に塞がった。まあき

「ん…。」斐オは田を覚まし、田を擦りながら周りを見渡す。他の人達はまだ寝ている。

「レンはどう？？」きょろきょろと周りを見たが、どこにもレンはない。

にすんな。」そういつて他の人のもとへ歩く。「おら、起きる。」「そういうながらグレンを軽く蹴飛ばす。「ぐはッ！？ってレン！お前もつと優しく起こせないのか！？…レン、お前その田どうした？」グレンはレンを見つめながら驚く。レンの瞳は紅に染まっていた。瞳孔は開いていないが、真っ赤になっている。

「…れは…まあいいだろ。」「まあいいだろって、なんか雰囲気も違うだろ。纏ってる氣も違うし。」グレンは真剣な顔で聞いただす。

「わらい…、話すにはもうちょっと待ってくれ。」そうぶつきらぼうに言った。そして助けた人達を指差し、「まずはこいつられて帰らうぜ。それから飯だ。」とフィオとグレンに微笑み、言うのであった。

?

「しつかし、すっかり口が暮れたなあ。」辺りにはもう日の光がなく、闇に覆われている。

「ほんとにある城をでれたのか…。助かったのか?」女剣士のトルチエが呟く。

「何言ってんだよ。生きてるに決まってんだろ! ってかさつきから何回いつてんだよ!」トルチエに向かってグレンが笑いながら言う。

「笑うことないじゃないか! あんな場所から出れるなんて思つてなかつたんだ!」一人がアーシュと魔法使いの男、フォールを背負いながらわざわざわざわざ出でます。

「お前らは静かに歩けないのか?」もう一人の怪我人である剣士風の男、ボルグを背負いながらレンはため息を吐く。

「あはははは…。申し訳ないです。でもほんとに夢みたいですよ、あんな恐ろしいことから出れたなんて…。ほんとにありがとうござります。」治癒士のポミーがレンに語りつ。

「俺らもお前らを助けにあそこに行つたわけじゃない。感謝する必要はない。」「す…すみません。」レンの言葉にしゅんとしながら小さい声で語りつポミー。

「レンは謝つて欲しいわけじゃないと懲りつよ。あんまし危ないことして欲しくないんだって。ねえーレン!」フィオはレンの顔を覗き込みながら語りつ。レンはそれには何も答えず、黙々と街に向かつ

て歩くのだった。

「おっ…おまえら帰ってきたのか！？」ギルドの主人は目を見開き、驚きながら言つ。「とりあえずこいつらの面倒を見てくれ。」レンは背負つてたボルグをベッドに寝かせながら主人に言つた。「わつ分かつた。」そう短く言つと街の治癒士を呼びに出て行つた。

「つーかおまえらも無謀な事したなー。ギルドランクいくつなんだよ？」グレンは適当にある椅子にどつしりと座り、笑いながらトルチエに話しかける。

「私達のなかではボルグがAクラス、他はBクラスだ。」グレンの問いかけにトルチエはぶつきらぼうに答える。

「ほー。なかなかやるじやん。だが自分達の力量を考えないとな

「危険だと感じたら逃げる勇気も必要だぞ。」グレンはおちやらけながらトルチエ達に言う。

「そんな事は分かつてる！」トルチエはグレンに対して怒鳴るが「ほんとにわかつてるのか？」すぐに怒りが恐怖に変わる。一瞬にして空気が重苦しくなり、トルチエはへたり込み、大粒の汗を額に滲ませている。「おい、そこまでにしろグレン。」パンツ！！レンはグレンの頭を軽く叩きながら言った。「いってー。」グレンは涙目になりながら、レンを睨む。

「あ……あなた達は一体……」トルチエが消え入りそうな声で呟いた。「ん……俺のこと知らんかったの？俺は紅い悪魔って呼ばれてるけど。」「

「「ツ！？」」「二人は共に驚いた。
(Sクラスの人だつたなんて！？)(確かに次元は違うのは分かつてた……けどあの伝説級だつたなんて！？)

「つーか腹減ったーレン。」「うるさい。少しは黙つてろ。」(こんな人が伝説級？？)二人はギルドのマスターが治癒士を連れてくるまで困惑していたのだった。

「ふー…くつたくつた。」「お前どんだけ食うんだよ。」お腹に手を当てて満足そうな顔をして言うグレンは頭を抱えながら言った。

「でもすこい食べっぷりだつたねー。」フィオは笑顔でグレンに言った。「やうだろやうだろ。フィオもいっぱい食べないと大きくならないぞー。」グレンはフィオに真剣な顔を向けながら言った。
「そうなの！？じゃあいっぱい食べるよ！」「フィオ…無理して食わなくともいいんだからな。グレンの言うことは話半分に聞かなくちゃだめだ。」「ちょッ！…レンひどいぞ…！」レンとフィオは笑い出す。しばらく三人でわいわいしながら時がすぎた。

「んじゃ俺はアーシュのとこに泊まつてくからまた明日だな。」「三人は店を出でどうするか決めようとしてた時、グレンがいった。
「そつかじやあ明日ギルドの前で待ち合わせだな。時間は…10時

「ひろでいいだろ?」「おっ、わかつた。んじゃな!」グレンはすぐ
に反転し、走り去つていった。

「それにしてもすぐ回復して良かつたね、アーシュ、ボルグとフ
オールだっけ。」「ああ、そうだな。」ぼんやりとあの後の事を思
い浮かべる。

ギルドの主人が呼んでくれた治癒士がすぐに治癒したおかげで三
人とも意識を取り戻した。グレンはアーシュを抱きしめ、それによ
り顔を真っ赤にしながらグレンの胸をぽかぽかと駄々っ子のように
叩いていた。まあ恥ずかしかつたんだろう。あのチームはトルチエ
とポミーが泣きながら、ボルグとフォールに抱きついていた。

一人は困っていた様子で「悪かつたな。」とか「ごめんな。」など
謝罪しながらあやしていた。フィオも俺の横で袖を握り締めなが
ら「本当に良かつた。」と咳きながら泣いていた。嬉し泣きつてと
ころだな。

「……ン、レ————ン——」「おうシ!？」フィオはレンの顔を
覗きながら精一杯大きな声で呼びかけレンを呼び戻した。レンは驚
いたのは言うまでもない。

「どうした、フィオ?」「どうしたじゃないよ、早く宿にかえろ
よ。」フィオは頬を膨らませながらレンに言った。「やうだな。
行こつか。」レンはフィオの頭をぽんぽんと軽く撫でると歩き出す。
隣を見ると「へへーっ。」と少し赤みがかつた笑顔をレンに向けな
がら、レンの隣を歩いていくのだった。

?

「準備できたか？」「ちよつと待つてレン！」フィオはドタバタしながら走ってきた。その様子を見てレンはクスクス笑いながら「そんな急がなくてもいいんだぞ？忘れ物はないか？」と優しく問いかける。

「斐オは鞄を降ろして中身をチェックして、忘れ物がないのを確認すると、「大丈夫！」と元気よくレンに答えた。「じゃあグレン達と合流しに行こう。」一人は宿を後にした。

「あ、グレーン！アーシエ！」 フイオは大きく手を振りながらグレンとアーシエのもとへ走る。

「フイオちゃん！」アーシュは手を振り返した。そしてフイオはアーシュに抱きついた。アーシュも笑顔でそれに応じていた。そんな中、歩いていたレンが遅れてついた。

「アーシュ無事で良かつたな。」「うん……、ってレンその瞳はどうしたの？霧因気もなんか違つし……。」「ああ……、これは色々あつ

てな。」「少しして整理がついたら話してくれるってレンが言ってたし、あんま気になくていいんじゃねえ？」グレンがレンのフォローをしながら「出発するんだろ？次はどこに行くんだよ？」とレンに問いかけた。「…そうだな。ギルドによつて主人に話しを聞いてみてから決めよう。

「おうレンじやねーか。昨日はありがとよ。街の人も感謝してるぜ。」ギルドに入つてから主人を探していると、後ろから主人に声をかけられた。

「いや、俺たちも主人の迅速な対応は助かつた。ありがと。」「ありがとうございます。」レンとアーシェは主人に対し礼をしながら頭を下げた。「よせよせ、あれは俺の仕事だ。んで今日はどうしたんだ？」主人がレン達に問い合わせる。「ああ、魔物の情報なんだが…なんか知ってるか？」主人は少し考え「北のアイスグラランに魔物が街に出たとか。」「アイスグラランか…。ありがとう。」それを聞いた後、レンは出口に向かい歩き始める。

「サンキューおっちゃん！」「ありがとうございました。」「ありがと。」グレンは主人に笑いながら、アーシェはペコリとお辞儀をしながら、フィオは手を振りながらレンの後に続こうとするが「おいッ！これを持つてけ。」主人が袋を一番最後のフィオに投げる。「これは？」フィオがうまくキャッチしてから主人に問う。「今回の報酬だ。持つていってくれ。」「ありがと。」フィオは笑顔で主人にいいながら、レン達の後を追つた。

「んでどうするんだ。結構遠いぞレン。」グレンはこれから的事をレンに問う。「あー、船で行く。」「ええッ！？」「あーそう。」

グレンはふつーに返すが、フィオとアーシュはすぐ驚いた。「んじゃ、いくか。」「船とかはじめてだー。」「船のチケットとかはどうするんですか！？」フィオは初めての船ということでおそわしているが、アーシュはひどくまともなことをレンに言つた。「多分大丈夫。」そういう、レンは田的の場所に歩き始めた。

「船のチケット四枚あるか？」レンは船員に聞く。

「あーもうチケット一枚しかないんだ。」「ええーーーじゃあ四人で船乗れないじゃん！」フィオは頬を膨らませながら言つ。「んーじゃあここでお別れだなフィオ、グレン、アーシュ…。」「はあ！？」「なんで！？」「ええーーー？」レンは悲しそうにみせながら言う。

その問いかけに対し三人はレンをみながら不満を爆発させる。それから最初に口火をきつたのはグレン「わざとらしく悲しそうにすんな！ってかなんで別れるんだよ！」「いやだつてもともとお前ら勝手についてただけじゃん。」「レンと一緒にじゃないのーーー？」「しようがないだろ。一枚しかないんだし。グレン達と後でこいよ。」「なんでみんなで一緒に行かないの？」「ちょっとと考えたいことがあるだ。まあ情報収集もしくからよ。」皆の問いかけに答える終わり「じゃあ行つてくる。」と手を軽く振りながら船へと向かつた。

「しゃーない。俺らは明日の船で行くか。」「そうね。チケットだけ買つていましょ。」「ぶーぶー。」「…拗ねないの、フィオ。」グレンは一人でチケットを買いに歩いていき、アーシュは拗ねているフィオをあやしながら待つてゐるのであった。

「まもなく出航します。」船が出港し、アイスグラնに向かう。レンは自分の部屋のなかで考え方をしていた。（これまでの俺は魔力なんて感知できなかつた。だがあの戦いの後からなぜか感知できる。それに…。）自分の手のひらを見る。

レンの手の中には黒い炎の塊があつた。それを握りつぶし、ベッドに寝転がる。（俺つて一体何者なんだ？この前の頭痛の時思い出せそうだったんだがな…。まあ分からぬ事を考えても仕方ないか。）レンは考えるのをやめ、目を閉じた。

?

「間もなくアイスグラնに到着します。お客様は降りる準備をしてお待ちください。」船内にアナウンスの声が響き渡る。

「んー…。」レンはベッドから上体を起こし、気だるそうに目を擦りながら背伸びをする。「よし、降りる準備だな。」そう呟くと自分の荷物をまとめ始めた。

しばらくするとまたアナウンスの声が船内に響き渡る。「船の長旅お疲れ様でした。目的地アイスグラնに到着しました。」レンは自分の荷物を持ち、船外に出る。

「雪か…。」外ではすっかり日が暮れていって、雪が降っていた。そこから街の様子を見ると辺り一面雪が降り積もり銀世界になつていた。レンは宿を探すため足早にその銀世界に踏み込んだ。

「すまんがここに魔物がでたと聞いたのだが…。」レンはギルドの主人に問う。その後レンは適当な宿をとつた後、ギルドに情報収集にきていた。

「ああ、普段はあるの雪山にいるんだが、最近街にも現れ始めたんだ。今常駐している騎士と、うちらで協力してるんだがこんな辺境の街だ、なかなか人がいなくて手を焼いてるんだ。」そういうながらレンをまじまじとみた主人は「あんたその剣、まさか…レンか？」「ああ。」すると主人はレンの手を勢いよく握りながら「手伝ってくれ！頼む！」と真剣な表情で頼み込んだ。

「もとからそのつもりだ。」レンは主人に力強く伝える。「助かる。ありがとう。…だがうちらは街の防衛で精一杯なんだ。せめて国から騎士が早く来れば出せるんだが…すまん。」主人はレンに頭を下げる。

「いや、問題ない。明日仲間が到着するはずだ。話を聞けてよかつた。ありがとう。」そう伝えるとレンはギルドを後にした。

(ん…。これがアイスグラランを救つたといわれる銀狼か。)レンは宿に戻る途中少し寄り道をしていた。この大きな銀狼の銅像を見るため。

その昔アイスグラランに魔物が現れた。その魔物はとても凶暴で街の人々を襲つた。男、女、子供皆殺しは当たり前。街も魔物に対抗したが、傭兵、騎士ともに少なく対抗できなかつたそうだ。人々が絶望に包まれた時に現れたのが銀狼だった。その銀狼は魔物と戦い、

長い戦闘の末その魔物を噛み殺し山に戻ったという話がある。今もあの山に住んでるかどうかも分からぬが……。

（こたとしたら今どうしてるんだろうな……。）そんなことを考えながら宿に向かい足を進めた。

（…血のにおい？）レンは立ち止まり辺りを見渡す。周りには暗闇が広がり静まり返っている。だがレンはその微かな血のにおいを頼りに探す。

（…ここか？）レンは路地裏を覗き込む。するとそこには血濡れの女性が倒れていた。レンは辺りの気配を感じながら進む。どうやら周囲にはなにもいないようだった。レンは女性を抱え上げながら状態を見る。女性は腹部に何か鋭利なもので刺された傷が見受けられるが、深くはなく命に別状はないようだ。ただ意識はなく酷く衰弱している。

「おい、大丈夫か？」レンは声をかけるが反応はない。レンは応急処置を済まし、女性を抱え直すと自分の宿に駆けていった。

「ん…。」女性は田を擦りながらぼーっとしながらあたりを見渡す。そして徐々に昨日のことを思い出し、自分の体を確認する。そこには包帯が巻かれており傷口の手当でがしてあつた。何がなんだか分からず呆然としてるその時、扉が開いた。女性は咄嗟に動ける体勢になりつつ扉を見つめる。

「起きたのか？体の具合はどうだつた？」扉から入ってきたのはレンだつた。その手には朝食が一つ。「お前が助けてくれたのか？」近づくレンに向かつて問いかける。「ああ、それにしてもどうしたんだ？傷だらけだつたぞ？」女性の前に朝食を置く。「…すまない。」女性は俯きながらそう呟いた。それを聞いたレンは頭をかきながら「まあいい、飯くつとけ。」レンは自分の分の朝食を食い始める。それを見た女性は自分の前に置かれた朝食を食べ始めた。

「世話になつた。ありがと。」朝食を食べ終えた女性は立ち上がり言つ。「行くのか？」「やらなきやいけないことがあるんだ。」「そうか。じゃあまたな。」レンはそつけなく返す、すると女性は一礼しながら出てつた。

(あいつ何処に行くんだ？) レンはあの女性の後をつけていた。
あのときに女性の鬼気迫る顔を見たとき、何か裏があるとレンは確
信していた。そのあと気配を消しながら後を追っているのだが、そ
の先にはあの雪山がそびえたっている。(おいおい、雪山入るとか
ないよな。) レンの考へてることは的中した。女性は雪山の麓に着
くと中に入り始めた。(チツ！めんどくさいことになりそうだな。)
(レンは気配を消して後を追い始めた。

「後追っかけたのはいいんだけど…やっぱめんどくさいことにな
ったよなー。」レンは一人呟く。周りには魔物の群れ。「結局あい
つも見失つたし。…潰すか。」一ヤリと笑う。そして背中にあつた
大剣を抜き構えた。

その頃船の上では。。

「早くレンに会いたいーーー会いたいーーー」手足をばたばたしながらグレンとアーシュに囁つ。グレンとアーシュは苦笑いを浮かべる。二人とも心の中で（早く着いてくれー。）と思っていた。

?

周りには魔物の死体の数々、真っ白な雪の上に紅い華が咲いていた。

「ちッ！数が多くすぎるっての。」レンは大剣を横になぎ払い魔物を蹴散らすが、レンの体にも無数の傷痕があり、血で真っ赤にそまつっていた。

（足場も悪い、数が多い…最悪な展開だな。）

流石に雪山に住むだけあってレンよりも機敏に動き、連携しながら襲い掛かる。「うぜーんだよッ！！」その咆哮と共に大剣を振る魔物を斬り殺したが、その後ろからレンに向かつて飛び掛ってくる魔物がいた。（やばッ！回避できねーぞ！）レンは飛び掛つくる魔物を見据えていた。

「なんか胸がざわざわする。なんだろー?」「じりしたんだ。」
胸を押さえているフィオにグレンが問いかける。「よくわからない。
けど…」頭をかしげ、うーんと唸つている。

(まあほつとしても大丈夫だろ。)

「ただいまー。つてグレン、フィオどうしたの?」甲板に出でいたアーシュが部屋に帰ってきたが、頭をかしげ唸つているフィオをみてグレンにいづ。

「わーからん。」手をひらひらさせながら部屋をぐる。

「どうしたのフィオ?なんかあつた?」アーシュはフィオの顔を覗きこみながら聞く。

「よくわかんない…。けどねなんかここの辺りがもやもやするの。

」フィオは胸を押さえながら考える。

「そつか…私はなんとなくわかるよ。」アーシュは窓際に歩きながらフィオに言う。

「この前精霊のこと話したでしょ。だから互いのことわかるの。なんていうかなー…以心伝心。お互いをお互いが認め合い、想いあつてれば相手の事が分かつたりするんじゃないかな。」「んー難しくて分かんないよ。」「ふふふ。そうかもね。もうちょっと大きくなつたら分かるかもね。」アーシュは微笑みながらフィオを見つめる。

そのとき「間も無くアイスグラնに到着します。お客様は降りる準備をしてください。」アナウンスの声が船内に響き渡る。
しばらくして「だつてよ。準備すつぞ。」部屋の扉を開けグレンはアーシュとフィオに言った。

レンは状況を冷静に分析していた。ある程度の怪我は覚悟して魔物の動きを見ていたが、飛び掛ってくる魔物の豪腕にあたる直前、白銀の何かが横切った。その後を目で追うと、そこには魔物を喰いちぎっている銀狼の姿が。銀狼は俺を一瞬見つめ、すぐ魔物の群れの中に突っ込んでいった。

（仲間なのか？まあいい助かったし。敵に向かっていったところからして敵ではなさそうだ。）そう分析し、銀狼の後を続いた。

銀狼は正面から魔物を蹴散らし、そのフォローをレンがする。だが魔物の大半が息途絶えたとき変化が起こった。銀狼の動きが著しく悪くなる。どうやら怪我をしているみたいだつた。

（これは少し雲行きが悪くなつたなあー。足場も悪いし。）そう思いつつ銀狼にむかって「俺が前にでるから下がれ！」魔物を斬り殺しながら叫ぶ。だが銀狼は構わず突っ込む。「このバカ！下がれって言ってんだろ！」レンは群れに突っ込む銀狼を見て怒鳴り、その後を急いで追いかける。

銀狼は三体の魔物を前足でなぎ払い、最後の魔物を見ようと振り返ると、すでに魔物の姿はなく「バカ！後ろだ！」銀狼はレンの言葉で飛び退くが、すでに魔物は口から氷柱を吐き出していた。

（間に合つてくれ！）レンは銀狼の前に飛び込む。そしてレンの脇腹に突き刺さる。辺りに血の花をさかせ、レンは意識を失った。

「まさかレンが先に目的地である山にむかつてるのはなあー。」
グレンはぼそっと呟く。後ろでフイオが「今から行くー！」と駄々をこね、その横でアーシェが必死になだめていた。

あれから街に入り聞き込みをしていたところ、すぐに情報が入ってきた。ギルドでは「漆黒の旅人」有名だつたし、なにより漆黒の外套と身の丈以上の大剣を持っているレンだ。はつきりといって目立つ。以上に目立つ。

その情報の足取りを追つてレンの行方を掴んだのはいいが、辺りはすっかり暗くなっていた。「これは明日じゃないとまずいな。とりあえず明日レンの後を追おう。夜になると魔物も動き出すからな。

「グレンはアーシュとフイオに言う。フイオは「ぶーぶー。」と頬を膨らませ抗議するが、夜になると魔物の多くが動き出すことを知つてるのでしようがないつといつところだ。その隣でアーシュは苦笑いを浮かべていた。

そうして三人は宿を探しに街の中を歩き始めた。

「つづ！これはどうなつてる？」レンは洞窟らしきとこまで田を見ました。脇腹から鋭い痛みで顔を顰めながら考える。

（あのときの銀狼はどうした？それにこの脇腹を治癒した後…誰がやつたんだ？丁寧に包帯まで。）

そうこう考へてるとき、ふいに足音が聞こえ大剣を構えようと手を伸ばすが、そこには大剣はない。周りを見ると少し離れたところに大剣が立てかけてある。取りに行こうとするが脇腹の怪我のせいで素早く動けず、振り返るとそこには人影が。

レンはその人影をじっと見つめ、どんな状況でも対応できるよう

か
ま
え
た。

?

「おまえは……ッ……なんでここにいるんだ?」視線の先には「の前助け、後をつけていた女性がいた。

「えつ……えーっと、たまたま通りかかったから?」女性は動搖しながら呟つ。

「ほんなどこにまたま通りかかるわけないだろ。おまえなんだろ……銀狼。」女性は一瞬びくつと体を震わせレンを見る。

「おかしいと思つたんだよ。」こんな雪山をひとりで行くなんてよ。レンは女性をみながらぼそつと呟く。

「おまつーつこしてきてたのかー!」女性は動搖かくせず一気にまくしたてる。

「うるせー。」レンはぼそつといい、顔をしかめる。「だつておかしきだろ……街で血濡れの女性なんて。最初からなんかあると思つたさ。んであいつらはなんなんだ?」レンは包帯を解きながら聞く。

「なんでいわないといけない。お前には関係ない。」女性は瞳を鋭くし、レンを射抜く。

「別に言わないなら聞くつもりもねえ。」包帯サンキュー。んじや。」「レンは大剣を背負い外にでる。女性はそれを何も言わず、見

えなくなるまで見つめ続けた。

「とりあえず雪山の観察だな。全く…なんでこんなに魔物が活性化してんだよ。」そう呟き。雪山を見上げる。そして歩みはじめた。

「つーかレバジ」にいつたんだよ。全然みつかんねーじゃん。」「ほんとだよー……レンー……ジ!」……」「そんな叫んでも出てこないよ……。」

グレン一行はレンを探すが見つからず、街をさまよっていた。

「しゃーねー。ギルドでもいつて情報収集でもすつか。レンの情報もあるかもしけねーし。」グレンが一人に話す。フイオはぶつとしながらも頷き、アーシェはそれを見ながら苦笑していた。

「ここがギルドか。入るぞ。」中に入り、受付にいた女性に声をかけマスターを呼んでもらうようにした。「早くレンに会えないかなー…。」フイオは椅子に座り、足をばたばたしながらつまらなさそーにしている。「すぐ見つかるよ。大丈夫。」アーシュはそんなフイオをみながら言つ。その間にマスターがグレンと話している。その様子を見ていた。

しばらく待つとグレンとマスターが話し終わったのか、グレンがアーシュとフイオのもとへ来てアーシュ達に言つた。「あいつ雪山に行つたかも…。」「えええええええ――――――！」

そのころレンは雪山を偵察していた。

「原因はあの付近だな。」レンは頂上を見つめる。「それにしても魔物が多くすぎる。」辺りには魔物がうろついている。

「行くしかない…か。」レンは大剣を抜刀し、魔物の群れに飛び掛る。そして近くにいた魔物を軽く両断し、次の魔物を狙う。魔物達も気付いたのかレンに向かつて襲い掛かってくる。レンは雪にも慣れたのか、以前よりも軽いステップで魔物に接近し叩き潰していく。

「くッ…魔法か…！」左から氷槍が襲い掛かる。何とか大剣で防ぎ、防ぎきれなかつたものはかわしていく。

「敵が多いな…。あの力を使ってみるか。」レンは黒い魔力を纏う。「うおおおおおおおおおお…！」その声と魔物に向かい大剣を振りぬく。その衝撃は漆黒の魔力を帯びながら魔物に襲い掛かる。魔物は漆黒の衝撃によりバラバラに切り裂かれた。

「これがこの力か…。」レンはこの光景を見ながら呟く。

そのとき山頂から爆音が響く、レンは大剣を背負いなおし山頂に向かつた。

「なに…」の音！「雪山に登り始めたフイオが言つ。「おいおい、もうレンの奴おっぱじめてるんじゃねーだろーな！」「分からないわ、山頂に急ぎましよう！」「だけどなーこいつらをなんとかしなくちゃいけねーだろ！」グレンは魔物を殴り飛ばしながら言つ。アーシュから放たれた矢は確実に魔物を捕らえ、次々と倒していく。

「数がこつ多いと先に進めねーよ！しゃーねー解放する！フイオを連れて遠くへ！！」「しょうがないわね！必ず戻つてくるのよ！暴走したら許さないからッ！」アーシュはフイオを連れて山頂に向かい走る。それを妨害しようと魔物が立ちふさがるが、「お前らの

相手は俺だつての。」グレンが魔物を殴り飛ばしアーシェ達の道を作る。その道を通りアーシェとフイオは山頂に向かった。

「さて…お前ら俺がなんで紅い悪魔と呼ばれてるか分かるかッ！」
燃えるような紅い瞳は瞳孔が開き、そして髪が黒から白へ。だが変わつたのはグレンのみではなかつた。周りの魔物も様子がおかしい。なにもされてないのに倒れてる魔物もいる。

「俺はな…周りに存在する全てから体力、魔力…生氣を奪っちゃういわば特異体质でな。本気で行かせてもらうぜ！」グレンは凄まじい勢いで魔物に接近し、殴り殺していく。

「カハハハハハハハハツツツツ…!!!!!! 次はどうだ！さっさと来いよおおおお!!!! 全員殴り殺して、かけらも残さず喰らい忽くしてやるよ!!!!」グレンは豪快に笑いながら魔物達（餌）を見つめる。

少し時間が経つと血だらけのグレンが多数の魔物の屍の中にたつている。「楽勝。楽勝。さっさと山頂へ行くかな。」頬についた魔物の血を舐めとりながら呟いた。

?

(ちッ！ここまでなのか…) 氷狼は息をきらしながら周りを見る。そこには魔物の大群。

「ここまでのような。氷狼の生き残り。」その声の主は魔物を従えている親玉であり、氷狼を襲つた張本人。外見は人間と似ているが纏つているオーラが人ではないことを示している。

(ヒイツ……) 氷狼は歯を噛み締める。

一族を滅ぼしたこいつ。大勢の魔物を従えいきなり現れた奴は里を襲い、容赦なく氷狼の長を殺し、里の民を殺し尽くした。たまたま里を離れていた自分はまぬがれたが、里は壊滅状態だつた。

その相手がここにいるのに自分の力ではどうしようもない、力のない自分に狂いそうだった。

「……やれ。」魔物の主の声とともに辺りにいた魔物が氷狼に殺到する。

(もう…駄目なのか…。) 氷狼は目をつぶる。

「フォースレイン！」どこからか力強い声とともに風切音の後、魔物の絶叫が聞こえた。氷狼は恐る恐る目を開ける。すると魔物の群れは血を流し、どいつも瀕死の状態。

「なに諦めてんの！？」後方から女性の怒鳴り声が響く。その声の女性は茶髪を後ろで結わいているエルフだった。弓を片手にこちらに走ってきた。その隣には紅い髪の毛の少女がいた。

その少女はこちらに来るなり私を回復し始め、エルフの女性は魔物達の前に立ちふさがった。

その山頂を目指すレンは一人で魔物達と戦闘の真っ最中だつた。

「ちッ！！」レンは漆黒の氷槍を無数に創造し魔物に撃ち出す。氷槍は魔物に吸い寄せられるかの様に刺さっていく。

「やつと終わつたか。」レンはあたりを見渡し魔物がいないのを確認し大剣を背負う。

山頂はついついやつより禍々しい雰囲気が強くなっている。

「おいレンじゃねーか！？」後方からグレンの声が聞こえ、後ろを確認する。そこにはやけに焦つた顔のグレンの姿が。

「おう。なんでそんな焦つてるんだよ。」「レンー・それどいろじやねーよ！ フイオとアーシュが先行つちまつてよ。」「どにだよ。」「山頂にきまつてるだろーが！」「…はあ？」「こきなりの事で状況が把握できずにグレンを見る。

グレンから大まかな話を聞き、やっと事態が飲み込めたレンはグレンと山頂に急ぐ。「なんでそんなことになつてんだよ！」「しおがねーだろー」ここに到着したらお前いねーし、山頂に行つたら魔物がでてくるしょー」「ちッ…またかよ…。しつこいッ！」目の前の魔物を斬り飛ばしグレンを見て言い放つ。

「ここは任せや。すぐに追いつく。」「早くこいよ！ 先行くぞ。」グレンは近くの魔物を殴り飛ばし、山頂に向かつた。

「やつさから連戦過ぎるだろ…。」漆黒のオーラを纏い大剣を構え、魔物の群れに突つ込む。魔物はレンに殺到し始める。

レンは手にした大剣で魔物を斬り倒しながら漆黒の雷を創造し魔物を打ち抜く。しかしレンの紅い瞳は目の前の敵を見ていなかつた。遠くから魔物の群れがあり、その軍勢の動向を見ていた。

(あいつらひづけに来るな。とにかく田の前の奴らをはやく潰さないとな。)

「それにしても数が多くすぎるー」田の前の敵を斬り殺し、叩き潰し、漆黒の魔法も使用するが数が多くて魔物の群れが来るまでに間に合ひそうもない。一旦どこかに隠れて機会を見たほうがいいかなーなど考え、距離をとろうとしたとき後方から漆黒の雨が降り注ぐ。

その雨に塗れた魔物は急に苦しみだし、体が溶け出す。そして雨が止んだ時には魔物の群れは体全体が全て溶け見えなくなっていた。

そしてレンが後ろを振り返ると同時に体に衝撃が走り抜け、そのまま後方に倒れる。

「つづー…なんなんだよ。」目の前には一人の女性の顔があつた。

「レン様！」にいたんですか！？」その声の主を見たレンはぼんやりと思った。どこかで見たような顔だなーと。

「どうしたエルフの娘。それで終わりか？」「いちいちつるさいわねー。」そうい的ながら魔法の矢を速射する。その矢は青年に当たる瞬間に消え失せる。

（ちつきから当たる間際に消え失せる。なにか魔法を消失する力が…？）アーシュは数秒思考するが、相手の攻撃が迫る。思考を素早く中断し、光球を避ける。

（じつに考えさせないつもりね！）アーシュは青年を見つめ動向をさぐる。

その遙か後方には氷狼とフィオの姿。フィオは必死に氷狼に治癒を施している。氷狼も当初よりは傷跡もなくなり、回復しているみたいだつた。氷狼は立ち上がりフィオに伝える。

「おい娘…。礼を言つ。俺はこれからあいつを潰しに行く。離れてろ。」「え…。うつうん。」フィオは少し驚きつつも少しだけ氷狼の後ろに下がつた。氷狼は素早く青年の背後に迫るとともに前足でなぎ払う。青年は見えてるかのようにあたる直前で手をかざし光の壁を創造する。前足は青年には届かなかつた。

（もうつた！）アーシュは魔法の矢を青年に向けて放つ。青年は近づく矢に気付いていない。（よし！あたれ！）その矢は青年の背中に突き刺さる。「いってー…。」青年は笑いながら振り向く。

「ツー！」その笑顔を見た瞬間全身が震え、体が重くなる。氷狼は素早く後方に大きく距離をとる。

「じゃあ遊びはここまでつて事で。本氣でいかせてもらつわ。」

青年は瞳を閉じて唱え始める。「我トライデントの名の下に神より授かれし第三の扉開かれたまえ。」そう唱えるとまばゆい光が青年を包み込む。

そして光が消えたとき、青年をみたアーシュは驚く。いや氷狼も

フィオも同様に驚いていた。

青年の髪、瞳は黄金に輝き、背中からは純白の羽。そして青年は言つ。「ジーグウェル様の下僕…第三位トライデント。貴様らの死に場所はここだ。」

?

「なんなのよ…」いつ。」アーシュはトライデントを見て唖然としてる。フィオもアーシュと同様。だが氷狼は違った。トライデントに氷のブレスを吐きつける。トライデントは純白の羽でブレスをいとも簡単にかき消し、氷狼に詰め寄り魔法で輝く拳で殴りとばす。氷狼はまともに拳を受け、凄い勢いで壁に叩きつけられた。

「大丈夫ッ！」フィオは氷狼に駆け寄り怪我の状況を確認した。出血は酷くないが、意識はなく気絶しているみたいだつた。そのまますぐに氷狼の治癒を始める。

「フィオ大丈夫なの！」魔法の矢で牽制しながらフィオに言う。だがそのアーシュもフィオを見ている余裕がない。トライデントは目の前に光の壁を創造し、徐々にアーシュとの距離を詰めていた。

「アーシュ！」扉を勢いよく開け。グレンが入ってくる。アーシュに近づくトライデントを見て状況を察知したのか、トライデントに飛び掛る。その行動を察知していたのか、グレンの拳をかわしへレンの腹部に輝く拳を叩き込み短く「バースト。」と詠唱した。すると輝く拳が爆発し、グレンは吹き飛ぶ。なんとか体勢を立て直し着地するが、ダメージは大きいのか腹部を押さえうずくまる。

「グレン！」そういながらアーシュが駆け寄る。トライデントがそうさせない。魔法を纏い輝く足でアーシュを狙い襲う。アーシュは体を捻り、からうじてかわす。

「ちゅッ…。アーシュ！俺は大丈夫だ。気にするな。」グレンはアーシュにせう叫び伝える。（そつは言つたものの解放はアーシュとかの負担が…。どうする？）そつ考へるつまにもアーシュにトライデントが迫つてゐる。

「考へても始まらないか…。行くぜー！」グレンはアーシュとの間に入る。

「アーシュいつものやつで行くぞ。」そう短く伝えると、グレンはトライデントの側頭部に回し蹴りを繰り出す。トライデントはそれを光の壁を創造し防ぐ。それを見越したのかすぐに体を反転し裏拳を繰り出した。

「なにッー！」トライデントは若干焦りながら手でガードする。

「グレン引いて！」アーシュはグレンが時間を稼いでる間に魔力を練りこんでいた。その声に反応しグレンは後方に飛ぶ。

「フェアリー・アローー！」力強い詠唱と共に圧縮された魔法の矢が放たれる。トライデントはとっさに光の壁を創造する。だがその矢は壁を突き抜けトライデントの右足を打ち抜く。

「グッ…！」トライデントは後方に羽ばたきながら距離をとり、治療をしようとするがグレンがすでに真横に移動していた。「あらああああ！」気合の咆哮とともにグレンの拳がトライデントの顔面を打ち抜いた。

(いけるのか？)ふとグレンがそう考へた刹那、グレンの背中から手が生える。「がはッ…！」口からとめどなく血が溢れ出る。「俺を顔面を捉えた褒美だ。」そつそつけなくいいグレンを蹴り飛ばす。

「グッグレン…。嘘でしょ。グレー――――ン！――！」「黙れ…。煩いぞ虫けら。」後ろから輝く拳を叩き付け「バースト。」爆

発しグレンと同じ方向に吹き飛ぶ。

「ツ！…」フイオは口を手で押さえ。田の前の光景が信じられなかつた。今まで一緒に旅してきた仲間が目の前で殺された。すぐに治癒しに行こうとするも目の前には奴がいる。なにもできない自分がくやしかつた。だがそんな事を考えているうちに奴の拳が迫る。

もう駄目だと思った。

そして最後に想つた（レン！助けて…。）

「ツ！…」トライデントは攻撃を止め後方に跳ぶ。そこには漆黒の炎が踊り狂つていた。そこにいたら少なくとも相当のダメージを受けていただろう。そしてそこには見覚えのある顔があつた。

「ククク…。ハーハハッハ！…！これは面白い！面白いすぎる！お前がいたのか！漆黒の王様がよおお…！！！」「なに抜かしてやがる。意味わかんないことほざいてんじやねーよ。イリア…あいつらを頼む。」「分かりました。」イリアと呼ばれた金髪の美女はグレン達の方に行き状態を見る。

（これは…ひどすぎますね。…あれ…この人達精霊の絆を…）すぐさまアーシュに近寄り「あなたの主はまだ助かる！信じなさい…」そしてグレンに「あなたも信じなさい。精霊との未来を！」

（俺は死んだのか…。）グレンは一人暗闇の中に漂いながらある一人の女を想う。ただ一人、相棒であるアーシュのことを。（やべえ…眠くなってきた。く…。）

その時一筋の光が差し込む。（なんだこの光。）その光に向かつて無意識に手を伸ばした。

（グ…ン…。）（この声は…。）光の先には生まれたままの姿のアーシュがいた。（一緒に行こうグレン。）（どこにだよ…。俺は死んだんだぞ。）（違う。まだ死んでないよ。あの人が言ってた。精霊の絆つて名ばかりのものじゃないんだって。共に生き、共に進むため、そして戦うための絆。私はあなたといつまでも一緒よ。さあ行こう。わたしたちの帰るところへ。）アーシュの差し伸べる手をグレンは掴み、光の元へ飛び込んだ。

レンは大剣を杖に立つて いる状態。そして多少傷を負つて いるが
余裕がみえる顔のトライデント。両者見れば戦局など明らかだろう。

「おいおいおいおい！なんだその無様な姿はよおー！漆黒の王と
呼ばれた男がこんななんのかあ！？もつと楽しませてくれよおお
おおお！！」「ちいツ！？」漆黒の炎を纏つた大剣を振るう。

「バーストオオオオオオオオオオ！」漆黒の炎に拳をぶち当て爆発。
漆黒の炎は消えうせ田の前の獲物に襲い掛かる。「光の拳受けてみ
なあああああああ！」レンはその拳を避けられないと悟ったのか大
剣を相手に向かつて走らせる。「カハツ！？」「ちいいいい！？」
！」両者はじけどぶ。凄まじい音を撒き散らし両者壁に衝突する。

「捨て身の剣ねえー…。おもしれー事してくれんじゃんよー」瓦

礫を吹き飛ばし。レンに向かって言い放つ。レンも瓦礫を吹き飛ばし奴を見据える。

「おっと。」トライデントは手をかざし光の壁を創造させる。その壁に黒い氷柱が衝突する。

「おつかねえー女だな…。」「今貴様をなぶり殺したいのは山々だがレン様の治癒が先だ。」「おいおいじやあ誰が俺の相手をしてくれんだよー?…あッ?」ふと殺したはずのグレン達の方向を見る。

「敵とあだ名す者の生を喰らい吸い尽くす死神。」倒れているグレンが呟く。

「あなたを包みこむ聖なる矢。」アーシュもグレンに続いて呟く。
「起現!深森の紅死神!!!!」一人の呟く祝詞。そして二人は光に包まれた。

?

「はーはっはっはー！！！おもしれーおもしろすぎるぜー！おまえら！」トライデントは光が収まつたところを見る。そこにはエルフの特徴的な耳、風貌はグレン、だが髪はグレンの黒ではなく、アーシエの茶色が混じっている。そして周りを漂つている光の矢。これはアーシエが魔力で創造する矢だ。

だがグレンの攻撃は終わらない。グレンの周りを漂つて いる光速の光の矢を放つ。

る」ことはできず、トライデントに矢が殺到する。

「ぐッ！？」全身に矢を受けたトライデントはなんとか踏ん張り耐えている。「あの世へいきなあッ！」矢は次々とトライデントに襲いかかる。いくらか虚脱感は軽くなつたが、どうやら腹部からきていることに気付く。（そういえばあの拳を受けた時に…テメエエエエ！！！）その顔に堪えきれない憤怒を宿しながらかわす。かわす。かわしまくる。

「も…もうだめ。」フィオは自分の魔力を使い切ったのかその場に座り込む。氷狼は傷もふさがり回復したのかゆっくりと立ち上がる。

「もう大丈夫なの？どこか痛いとこない？」「ああ…。一回も助けられたな。ありがとう。」「えッ…。どういたしまして。」フィオは疲労の色がにじみ出ている顔から一瞬驚きの表情を浮かべ答え る。

「こんな感じのしゃべり方だつたつけ！？などと考えていたフィオは、ふと氷狼を見ると、真剣な眼差しでトライデントを見ていた。

そしてゆっくりとトライデントに向かい歩く。それを見ていたフィオは慌てて「もう駄目だよ！あの強さ見たでしょ！グレン達に任せて休みなよッ！」と言い放ち、氷狼の前に立ちはだかる。

「知ってるわ…。だが引いてはいけないときもあるんだ。一族を皆殺しにされて黙つてられん。」フィオの瞳をまっすぐみながら力強く言い、フィオの横を通り過ぎる。フィオには止められなかつた。あの力強い瞳、そして言葉を聞いてしまつては…。

いくらか冷静さを取り戻したのかトライデントは考える。（しかし精霊の絆をこんなところで揉めるなんてなッ！正統がこんなだとはな…。まあ強いつちや強いが…。）目の前の敵を見て、しつかりとその顔を脳に刻み込む。そして凄まじい形相で睨み（次あつたときは必ず潰し殺してやるッ！！！！）

そして矢をかわし終えた時、その憤怒を発露させる。「うつと一しーんだよークソヤローが！！！」トライデントの周囲に數え切れ

ないほどの光球が創造される。「全員吹き飛びな！」その光球がトライデントの叫びにより四方八方に飛来する。

グレンは光球に向かつて矢を放ち相殺させる。イリアは魔法で壁を創造し防ぐ。回復を終えているレンはふと後方にいるフィオを見る。フィオはいきなり放たれた光球を防ぐすべもなく右往左往していた。

「ちッ！？」レンは走る。「レン様！？」途中、イリアの声が聞こえたが構っている暇などない。飛来してくる光球を斬り捌きながらフィオにたどり着く。

「レンッ！」助けに来てくれたレンを満面の笑みで答える。「じつとしてろよ！」レンはこちらに飛来する光球を退けながら、ふと氷狼の姿がない事に気付いた。ゆっくりと気配を探つているとトライデントの近くで見つけた。トライデントの背後をとる氷狼。だがトライデントがニヤリと笑っていた。その瞬間
悪寒がはしり、いつでも魔法行使できるよう漆黒のオーラを纏わせる。

(その首とつたあ！)氷狼はトライデントの首を刈り取るつと氷爪をはしらせる。そして首をあつさり跳ね飛ばす。

(なにッ！)だが残念ながらトライデントの影は実体ではなかった。氷爪が切り裂いた瞬間、陽炎のように消えた。

(どこにいるッ！）気配を探るがその前に光の槍が氷狼の背後に迫る。氷狼は光の槍に全く気付かない。だがその槍は氷狼には届くことはなかつた。その前には漆黒の氷壁がそびえ立つていた。

トライデントはレンに一瞬視線を向ける。レンは右手をトライデントにかざしながら魔法を使っている。（ここへきて漆黒の王が邪魔するのかよッ！全くどいつもこいつもイライラさせる…！もう魔力も残り少ないし…。結局氷狼一匹殺しそこねた。）そして自らの光の魔力に包まれながら消えていった。

その間にも光球はあちらこちらに衝突し、暴れまわり、雪が舞い散り視界を遮る。その躊躇が終わり辺りも見れるようになつたが、トライデントは見当たらずもう逃げた後だった。

「ちッ！？逃げられたのか…。」グレンは忌々しげに呟き、精霊との盟約（祝詞）を解く。グレンの周りが輝き、それが収まるときそうに蹲つてる一人の姿。「おいおい大丈夫かよ…。」レンはグレンとアーシェに問い合わせる。「あーきつッ！」「もう動けない…。」二人とも大の字に寝転びながら答えた。

みんなが疲弊しきつていてる中、氷狼はレン達に向かい歩を進める。

「レン…といったな。助けられたありがとう。」

「あー。気にすんな。んでこれからどーすんだよお前。」寝転んだ状態から姿勢を正しながら問う。その返答をかえす前に、眩い光

に包まれ、収まると人型になっていた。

その姿はレンが見たあの姿だった。褐色の肌、少しつり田がちな大きな瞳、スレンダーな姿、純白の髪は軽くウェーブしている。

「ええええーー！人になれるの…」「…少し煩いぞフィオ。」
フィオが驚き、女性を指差すが、それをレンが苦笑いのまま注意する。

「ああ…。フィオ、治癒ありがとう。それとレン、俺はシェリル
つて名前がある。そつちで呼んでくれ。」ハスキーナ声でフィオに
礼を、レンには名前を言いつ。

そして少し間を空けてからレンの質問に弱弱しく答える。「一族
はあのトライデントとかいう奴に殺された。ここであいつを殺して
一族の仇をとるつもりだったが、この様だ…。俺はこれからどうす
れば…。」俯き、涙を見せぬよう、悲しみにたえるよう拳を握り締
めていた。その姿からスノーウーハルの守護者と誰が思うだろつか。
静寂があたりを漂う。

シェリルは俯いていたが誰かが近づく気配を感じ取った。その影
から手が差し伸べられる。

「じゃあ俺らと来るか。」声の主を見ようと恐る恐る顔を上げる
と、そこには優しく包み込むような笑顔のレンの姿が。

唇を噛み締め、今にも泣きそうな顔のシェリル。一筋の涙を流し、
シェリルはレンの手を握り返す。

レンはその手を引き寄せゆっくりと、優しくシェリルを抱き寄せ
「無理するな…。」その言葉はいつもたやすくシェリルの涙のダム
を決壊させた。

そこには眞の笑顔とショリルの泣き声でいっぱいだった。

?

「レン様！話を聞いて貰う約束がありましたよねッ！」イリアがレンに詰め寄る。レンは思考する。なんで朝からこいつめんどくさい事が起るんだろうと…。

あの戦いから一日が過ぎ、皆はアイスグラントの宿に泊まっていた。山を下山する時はそれぞれ疲れていたのか会話はなく、少し急ぎながら歩いていた。宿に入った後はすぐに解散となりそれぞれの時間を感じた。ほとんどの連中は寝ていたが。

次の日の朝、まだ早い時間帯にドアを叩く音がした。

「ふあー…。はこはこ。なんだよこんな朝早く…。」のんのんとベッドから起き、ドアを開ける。

「レンおはよう…出掛けよーーー」 フイオはそつまごながらレンに抱きつこうと飛び込む。しかしレンはそれを当然の様に避ける。「うわああああーー?」 フイオはレンが避けたためこける。

「はあ…。寝よ。」 レンはベッドに戻り布団に入る。

「こつたあー…」 フイオは痛むおでこをさすりながらレンを捲す。そして見つけた。寝ているレンの姿を。そこからの行動は速かつた。すぐさまレンの上にダイブし「なんで避けんのー! なんで寝ちゃうのーーなんでー! なんでー! なんでー!」 ポカポカとレンを叩きながら訴える。

「だあああーー? 煩いぞおーーー」 「うああああああーー!」 フイオと布団! とびつくり返しフイオに叫ぶ。 フイオはそのままベッドから布団と共に落ちていく。

「そんなに出掛けたいならグレンとかと一緒にこいがばこだらうがー!」 布団に絡まってるフイオは泣きそうになりながらレンを見上げてボソリと言った。 「レンと行きたいんだもん…。」

「はあー…。分かった、分かった。行くよ。」 頭をかきながらそっぽを向きフイオに叫ぶ。 「…レン。ありがとう…。」 先ほどの空気がまるで嘘の様に、満面の笑みをレンに向けるのだった。

「レン！あっちに雑貨屋があるよ！行こう行こうー。」「分かったから手を引っ張るなつて。」あれから宿を出た一人は適当に飯屋に入つて遅めの朝食をとり、街の散策に向かつたのだが。

わかつてた。わかつてたさ。フイオがはしゃぐ事くらい。だが流石に疲れるぞ。今レン達は雑貨屋に入ったのだが、その前には服屋、アクセサリーショップともう何件も周り尽くしたが、フイオは止まらない。

「どうどうこれ？似合つ？」フイオは漆黒の髪飾りを髪にかざしながらレンに見せる。レンは「ああ、似合つてるよ。フイオそろそろ戻ろう。これからのことでも話さないといけないだろ。」と苦笑しながら言つ。

フイオは不満なのか唇を尖らせる。「もうちょっと遊ぼうよ。」「また今度付き合つてやるから。なッ？」「分かった……。」「ぶーぶー言いながらも分かつたのか、不満を隠そうとしないが大人しくレンの隣に向かう。

「じゃあ手繋いでかえろ?」 フイオはレンを見つめ手を差し出す。
「…分かつた。」 フイオの手を握り返す。 フイオは顔を赤くし先ほど
の不機嫌が一変、上機嫌でレンと二人宿に向かった。

「んでこれからどうするかだが…。」 宿に戻りグレン達と合流し、
酒場に来ていた。

「つーか、なんで氷狼の里が襲われてたんだ?」 グレンはシェリルに問う。「俺にもわからないんだ。俺が知りたい!」 声を荒げながらかえすシェリル。トライデントに対する憎悪はぐすぶつていた。

「なにか引っ掛かる。精霊に関係あるのか?」 レンは考え込む。エルフの里にも魔物の群れがある。そんなことを考えていると「精霊に関係あるってどういうことだ?」 シェリルが興味深そうにレンに聞く。「前にエルフの子を助けて成り行きで村を助けたことがあつた『エルフの村つてどこの?』」 アーシュがレンの話を遮り、ぱっと顔を近づけ詰め寄つた。「…村の名前まではわかんねーよ。たしか一緒にいたエルフはアルシユナとか呼ばれてた『アルシユナつて…妹じゃないッ!!』」 アーシュはレンの肩を掴み前後振り、

自分の妹の名前が出たことに動搖していた。

「お…おこッ！アーシュ落ち着け！」「はッ…？」めんレン！」「グレンの声に気がついたアーシュは、ぱっとレンの肩を掴んでいた手を動かすのをやめ手を離した。「でもその話ちゃんと聞きたい。教えてレン。」レンはアルシユナと会ったときのことを皆に話し始めた。

アルシユナと会ったときのこと。神族との戦闘。神族が最後に言い放つたジークウェルという人物の存在。魔物が今回と同じようにどこか統率されているような動き。そして結界が張っているエルフの村をピンポイントで狙っていたこと。

すべて話しあえたときシエリルが呟く。拳をぎゅっと握り、怒りを隠さずに「…俺の時と一緒に。村に帰るうとしたときの方から魔物の大群が村から離れていくとこをみた。あのトライデントという奴もいたと思う。」「なッ！？てことは精霊に関係あるじゃない！」「どうやらそれであたりっぽいな。」アーシュの声に反応してグレンは静かに呟く。

「だがそれが分かつたからと云つてどうする？精霊の居場所なんて全て把握できるのか？」レンが呟くと既それぞれどうすればいいか考える。だがイリアだけは違っていた。「…レン様、本気で言つてるんですか？」「本気ってどういうことだ。」レンはイリアに顔を向け尋ねると「レン様ならやりようなんていくらでもあるじゃないですか！国の精霊達に声をかけるとかッ！」「国？なんのことだ？」瞬間、イリアの顔が凍る。そして「漆黒の王と慕われてたじやないですかッ！？いきなりいなくなつて、心配して捜したんですよ

「……どうしたんですかレン様……」レンに向かって泣きながら、まくしてた。

「ぐ……」レンは急に頭を抑え、膝を突く。（また頭があ……なんなんだ。）フィオたちの声を聞きながら、レンは静かに意識を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4819j/>

漆黒の旅人

2012年1月5日22時12分発行